愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 15 号
2014-3
29-52p

下津宿遺跡の再検討
—金属関連資料・微細遺物・掘立柱建物跡から—

● 蔭山誠一・鈴木正貴・
中村賢太郎 ※
※　株式会社パレオラボ

『下津宿遺跡』（樋上編 2013）では十分に検討・掲載できなかった金属関連資料・土壌水洗篩別により抽出された微細遺物・掘立柱建物跡の分析を行う。この結果、鍛冶関連遺物の出土量・動物遺体の組成・掘立柱建物跡の規模などが調査地点により異なることが明らかになり、溝で画された区画の性格を読み込む材料となることを示した。今後はその他の資料と具体的に分析することによって、中世下津の空間利用の変遷を明らかにすることが求められる。

はじめに

平成 22 ～ 23 年度に下津宿遺跡（発掘調査時は鎌倉街道周辺遺跡）の発掘調査が愛知県埋蔵文化財センターにより行われ、鎌倉時代から室町時代にかけての「中世下津」に関わる遺構・遺物が多数確認された。この成果は報告書『下津宿遺跡』（樋上編 2013）にまとめられたが、今回の分析は、報告書では十分に検討・掲載できなかった金属関連資料の分析、土壌水洗篩別作業により確認された微細資料（金属関連資料、貝・骨・炭化物資料）の紹介、掘立柱建物跡の検討を行い、下津宿遺跡の空間利用について若干の考察を加えたものである。

金属関連資料の分布と資料群

金属関連資料には、椀型滓、流動滓 A、流動滓 B などの鉄滓、銅滴、とりべ、鉄製品、鉄塊系遺物、含鉄遺物、鉄片、鋳型、鞴の羽口、炉壁、粘土塊がある（金属関連資料の分類については蔭山・鈴木 2002、鈴木・蔭山 2004 などを参照）。今回はこの金属関連資料の中で鍛冶関連資料として椀型滓・流動滓 A・流動滓 B の鉄滓、鉄関連資料として鉄製品・鉄釘・鉄塊

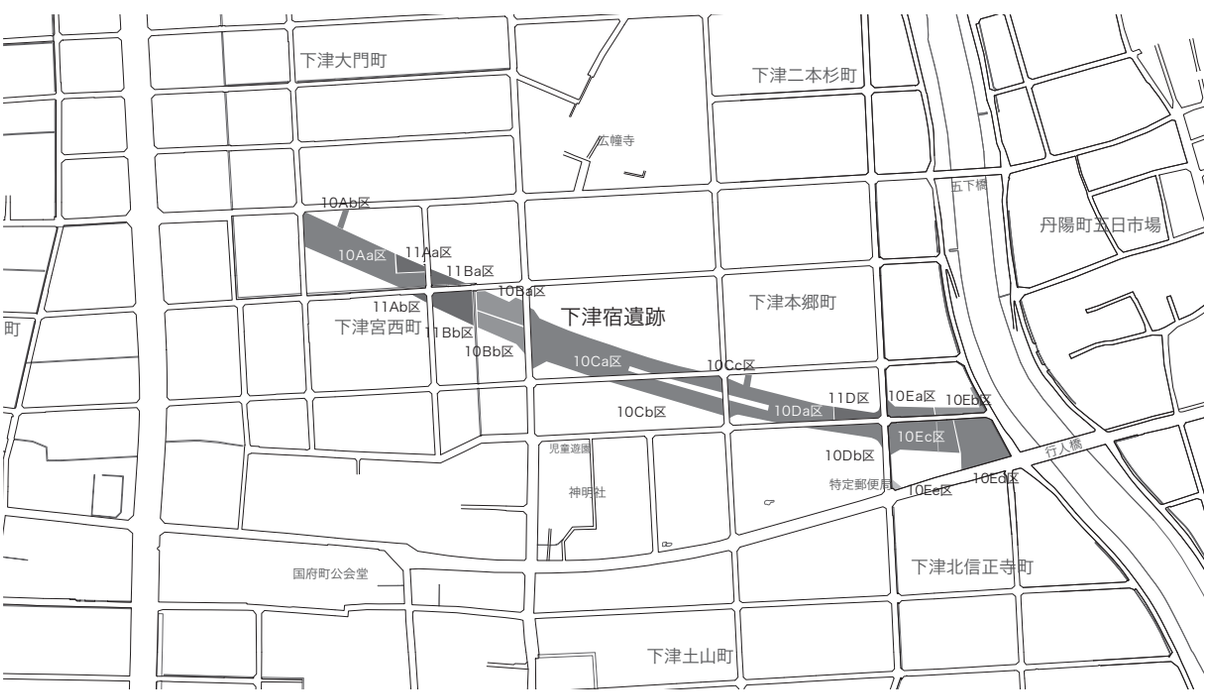


図 1　下津宿遺跡調査区位置図（1/5,000）

系遺物・鉄片・含鉄遺物、鍛冶や鋳造などの金属加工に関する粘土製資料として鋳型・鞴の羽口・粘土塊・炉壁、銅関連資料として銅滴・トリベ・銅製品・銅銭の4つに大別して各資料の分布とその時期を検討する。資料の分布は、発掘調査の際に記録された5mグリッド毎に出土地点をカウントする。

（1）金属関連資料分布と時期（図2～5･表1）

金属関連資料の分布は、10Da区より東側の調査区に多く、10Cb区・10Cc区より西側の調査区ではあまり多くない。また10Da区より東側の調査区では、11D区と10Ea区の地点で最も分布が多く周辺地点は少なくなる傾向を示す（樋上編2013）。今回は金属加工に関する工房や作業場を検討するために、まず資料の出土点数が多く、鉄加工の痕跡と認識しやすい鍛冶関連資料の分布について、遺構の分布も考慮しながら、比較的集中する範囲を11ヶ所抽出し、その分布集中範囲と併せて、銅関連資料、鉄関連資料、粘土製資料の出土分布についても述べたい。

10A群：10Aa区と10Ab区の西側に分布する資料群で、椀型滓11点がある。鍛冶関連資料の出土遺構で時期がわかる遺構には10Aa区0002SD・0100SDがあり、その時期が15世紀前半であることから、10A群の時期を15世紀前半に想定しておきたい。

鉄関連資料では、鉄釘13点、鉄塊系遺物5点、含鉄遺物21点があり、鉄関連資料が比較的多くみられる。銅関連資料では銅銭が1点ある。

粘土製資料の出土はない。

11Aa群：11Aa区に分布する資料群で、椀型滓6点、流動滓B1点がある。鍛冶関連資料は時期の判明する遺構から出土していないので明確な時期は不明である。ただし11Aa区では12世紀後半の遺構が比較的多いことから、この時期の可能性がある。

鉄関連資料では、鉄釘1点、鉄塊系遺物3点、含鉄遺物2点がある。鍛冶関連資料も少ないが、鉄関連資料も少ない。

粘土製資料は、炉壁が1点ある。

10B群：10Ba区の南東側から10Bb区の西側に分布する資料群で、椀型滓4点、流動滓A1点、流動滓B1点がある。鍛冶関連資料は時期の判明する遺構から出土していないので明確な時期は不明である。ただし10Ba区・10Bb区では14世紀後半～15世紀前半の遺構が比較的多いことから、この時期の可能性がある。

鉄関連資料では、鉄製品4点、鉄釘21点、鉄塊系遺物3点、鉄片1点、含鉄遺物8点があり、比較的多くみられる。

銅関連資料では10Ba区中央部で銅製品2点、銅銭20点がある。そのうち銅銭は10Ba区327SKから8点、近在する309SKから1点など19点がまとまって出土している。327SKは永楽通寶を含むことから、15世紀にかかる遺構であり、墓である可能性がある。

粘土製資料では、鞴の羽口が1点、炉壁1点、粘土塊2点がある。出土点数は少ないが、出土分布が鍛冶関連資料と類似し、相関性がみられる。

10Ca西群：10Ca区の北西側に分布する資料群で、椀型滓14点がある。鍛冶関連資料は15世紀前半～後半の10Ca区0208SK・0354SK・1300SD・1320SDから出土していることから15世紀前半～後半の資料群と考えられる。銅加工に関連するトリベは、10Ca区中央部北側の1964SDから1点出土しており、遺構の時期は13世紀中頃である。

鉄関連資料では、鉄釘48点、鉄塊系遺物1点、鉄片3点、含鉄遺物22点がある。鉄関連資料が比較的多くみられる。

粘土製資料では、炉壁1点、粘土塊7点がある。 出土点数は少ないが、出土分布が鍛冶関連資料と類似し、相関性がみられる。一方、銅関連資料のトリベ1点との相関性は弱い。

この他に、銅関連資料では銅銭が5点ある。

10Ca東群：10Ca区の中央南側に分布する資料群で、椀型滓5点、流動滓B2点がある。鍛冶関連資料は10Ca区0887SKから出土しており、13世紀後半～14世紀前半の10Ca区1510SDの上層で検出された遺構であることから、この資料群を14世紀のものと考えておきたい。

鉄関連資料では、鉄製品3点、鉄釘15点、鉄塊系遺物1点、含鉄遺物10点があり、鉄関連資料はあまり多くない。

粘土製資料では、鞴の羽口1点、粘土塊3点と少ないが、鍛冶関連資料と出土分布が近い

表1　金属関連資料一覧

鍛冶資料群	時期	椀型滓	流動滓A	流動滓B	鉄製品	鉄釘	鉄塊系遺物	鉄片	含鉄遺物	銅滴	トリベ	鋳型	銅製品	銅銭	鞴の羽口	炉壁	粘土塊	白雲母	備考
10A群	15世紀前半	11				13	5		21					1					
11Aa群	中世	6		1		1	3		2							1			
10B群	中世	4	1	1	4	21	3	1	8				2	20	1	3	2		
10Ca西群	15世紀前半～後半	14				48	1	3	22		1			5		1	7		
10Ca東群	14世紀	5		2	3	15	1		10					1	1		3		
10Cb群	14世紀後半	28	2		3	53	3		33	1			1	5	2	4	3		
10Da西群	中世	5			1	15			6					1		1			
10Da東群	13世紀後半～15世紀	118	1	5	20	144	8	2	95			1	4	14	4	9	40	19	13世紀後半～14世紀中頃が中心
11D群	13世紀後半～15世紀前半	260	24	67	19	129	8	1	120	1	4	5		23	48	75	16		14世紀後半が中心、トリベは15世紀中頃、鋳型の時期は14世紀
10Ea・Ec群	14世紀前半～15世紀後半	228	10	10	27	219	12	4	209			3	7	79	18	15	10		
10Ed群	15世紀中頃～後半	39			22	47	1	6	41	3		8	4	3		10	44		鋳型の時期は15世紀中頃～後半

所もあるが、相関性は弱い。

銅関連資料では、銅銭が1点ある。

10Cb群：10Cb区の西側から10Cb区の東側と10Cc区の南西側に分布する資料群で、椀型滓28点、流動滓A2点がある。鍛冶関連資料は14世紀前半～後半の10Cb区0135SD・1027SDから出土していることから、資料群の時期は14世紀後半と考えられる。

鉄関連資料では、鉄製品3点、鉄釘53点、鉄塊系遺物3点、含鉄遺物33点がある。鉄関連資料が比較的多くみられる。

銅関連資料では、銅加工に関連する銅滴が10Cb区の西側に1点出土しているが、時期の分かる遺構からは出土していない。銅製品は10Cb区中央部にて1点、銅銭が5点出土している。

粘土製資料では、鞴の羽口2点、炉壁4点、粘土塊3点と少ない。粘土製資料の出土分布は、銅滴の出土分布より鍛冶関連資料の出土分布に相関性がみられる。

10Da西群：10Da区北西側にて分布する資料群で、椀型滓5点がある。鍛冶関連資料は、時期の判明する遺構から出土していないために、詳細な時期は不明である。

鉄関連資料では、鉄製品1点、鉄釘15点、含鉄遺物6点がある。鍛冶関連資料も多くない小群なので，同様な傾向が認められる。

粘土製資料では、炉壁1点が認められるが、鍛冶関連資料の出土分布とは相関性がない。むしろ、10Da東群との関係が推定できる。

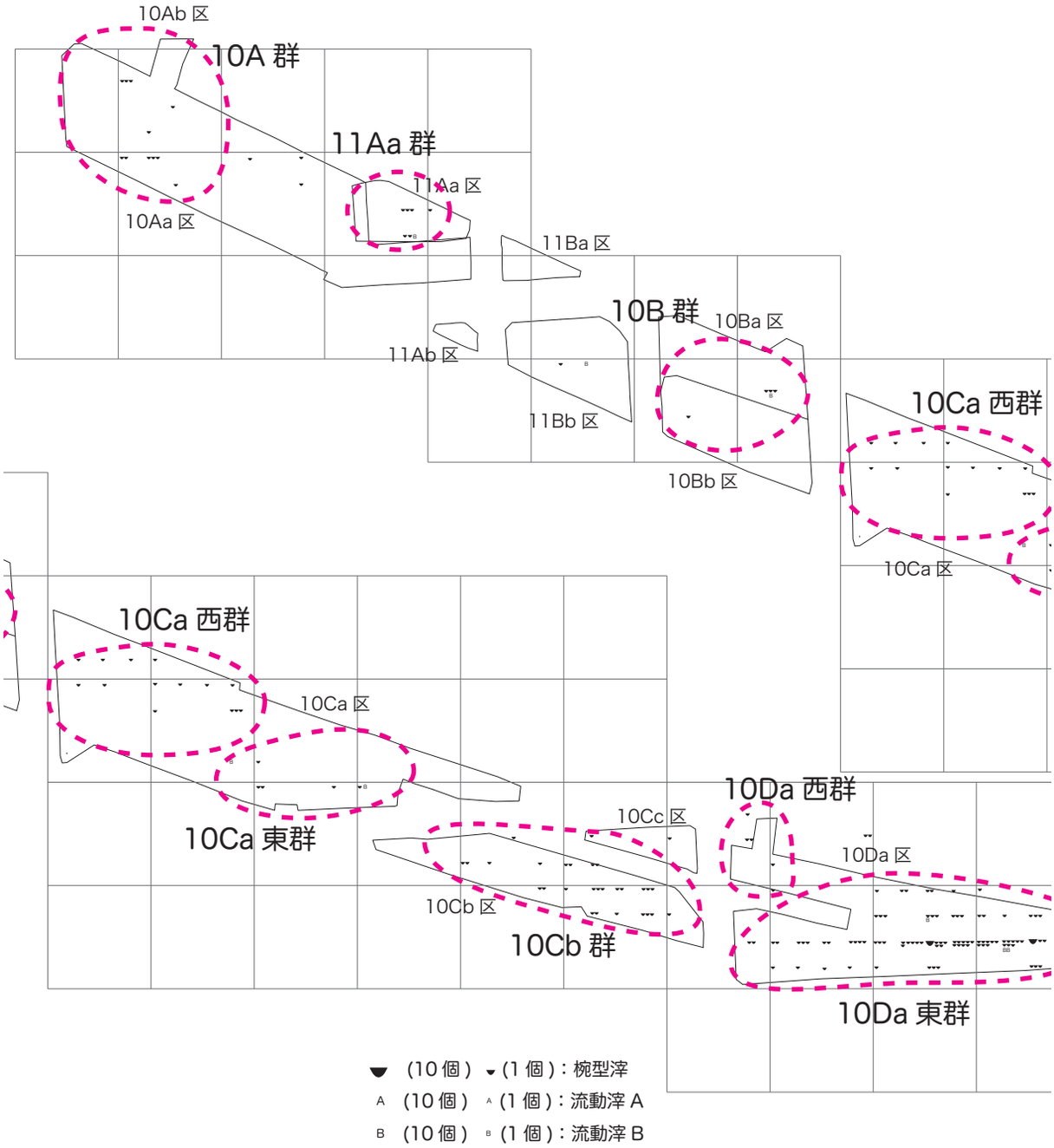
銅関連資料では、銅銭が1点ある。

10Da東群：10Da区の南西側から10Da区の東側の範囲にひろがる資料群で、椀型滓118点、流動滓A1点、流動滓B5点がある。鍛冶関連資料は13世紀中頃～後半の10Da区1435SD、14世紀中頃の0707SK、15世紀前半の1440SD・1710SDや15世紀前半～中頃の0130SK、15世紀後半の0180SDなどで出土していることから、13世紀後半から14世紀中頃を中心に15世紀にまで続く資料群と考えたい。

鉄関連資料では、鉄製品20点、鉄釘144点、鉄塊系遺物8点、鉄片2点、含鉄遺物95点がある。鍛冶関連資料と同様に鉄関連資料も多い。

銅関連資料では、銅製品が10Da区中央部で4点、銅銭が10Da区の南西側から東側にかけて14点出土している。

粘土製資料では、鋳型1点、鞴の羽口4点、炉壁9点、粘土塊40点があり、出土点数が比較的多い。粘土製資料は、鍛冶関連資料の出土分布と相関性がみられる。また、銅滴と鋳型と粘土塊の出土分布にも弱い相関性があるようにみえる。なお、鋳型の時期は不明である。



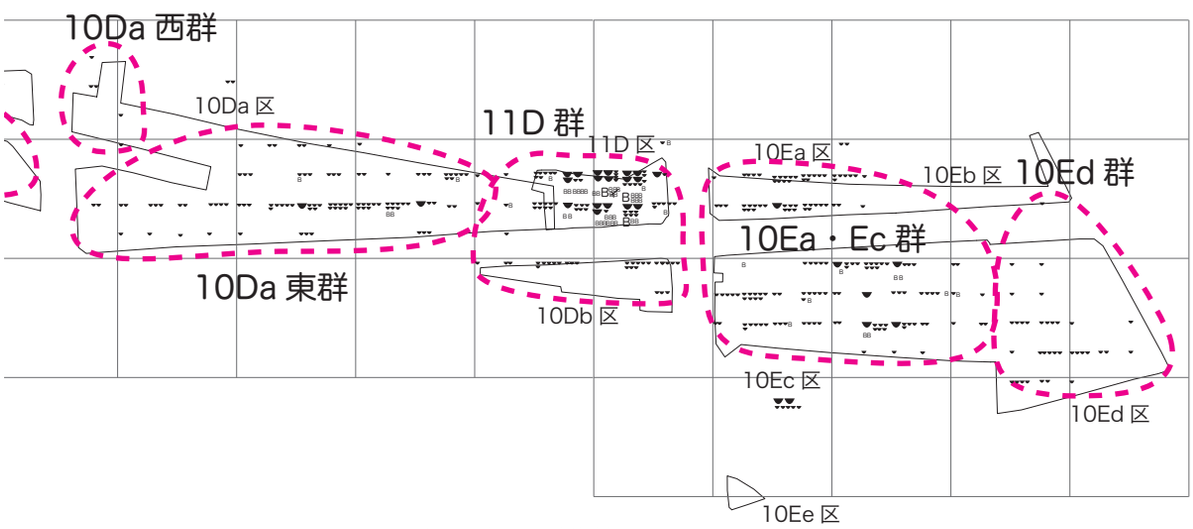


図 2　鍛冶関連資料の分布（1/1,250）

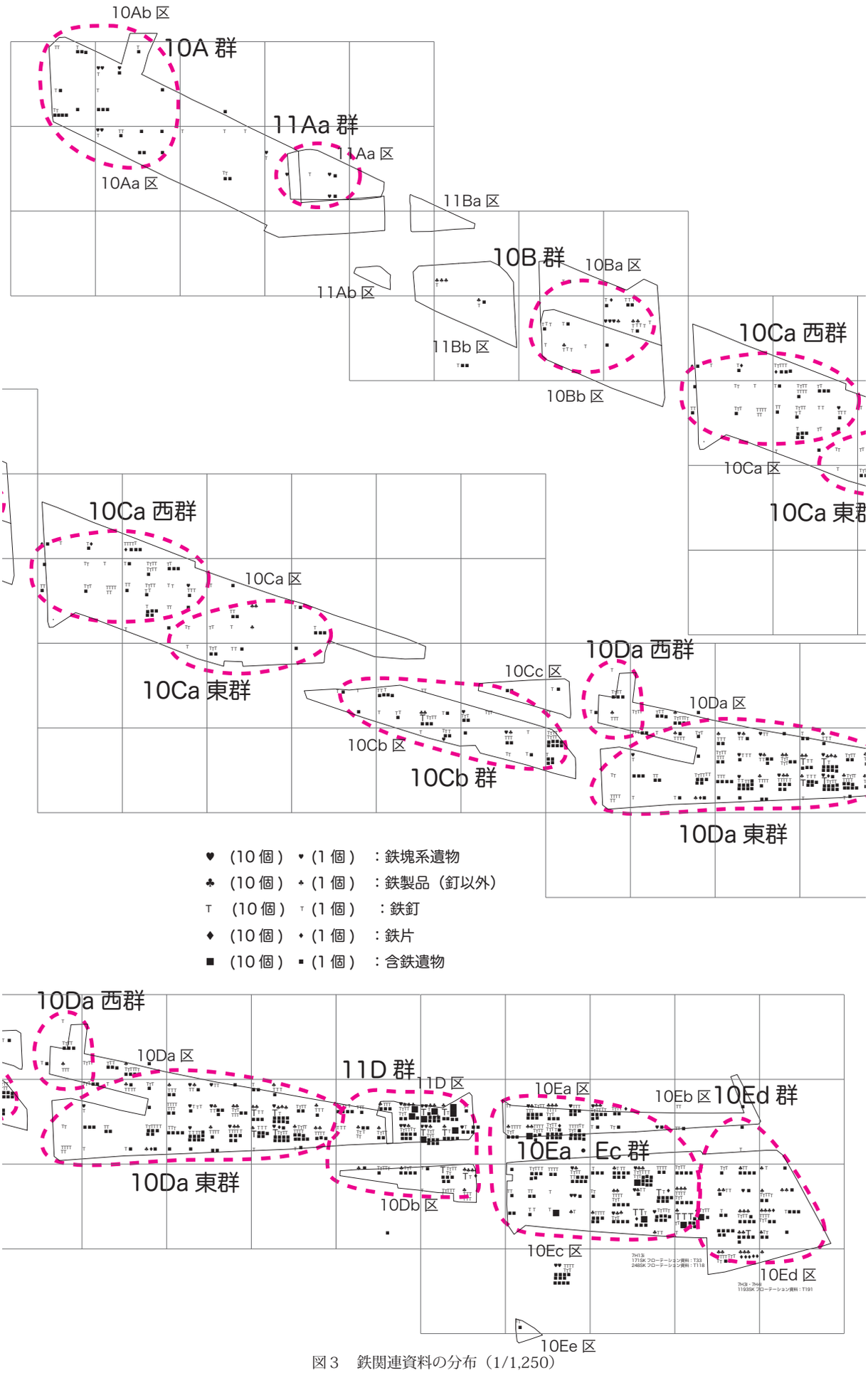


図３　鉄関連資料の分布（1/1,250）

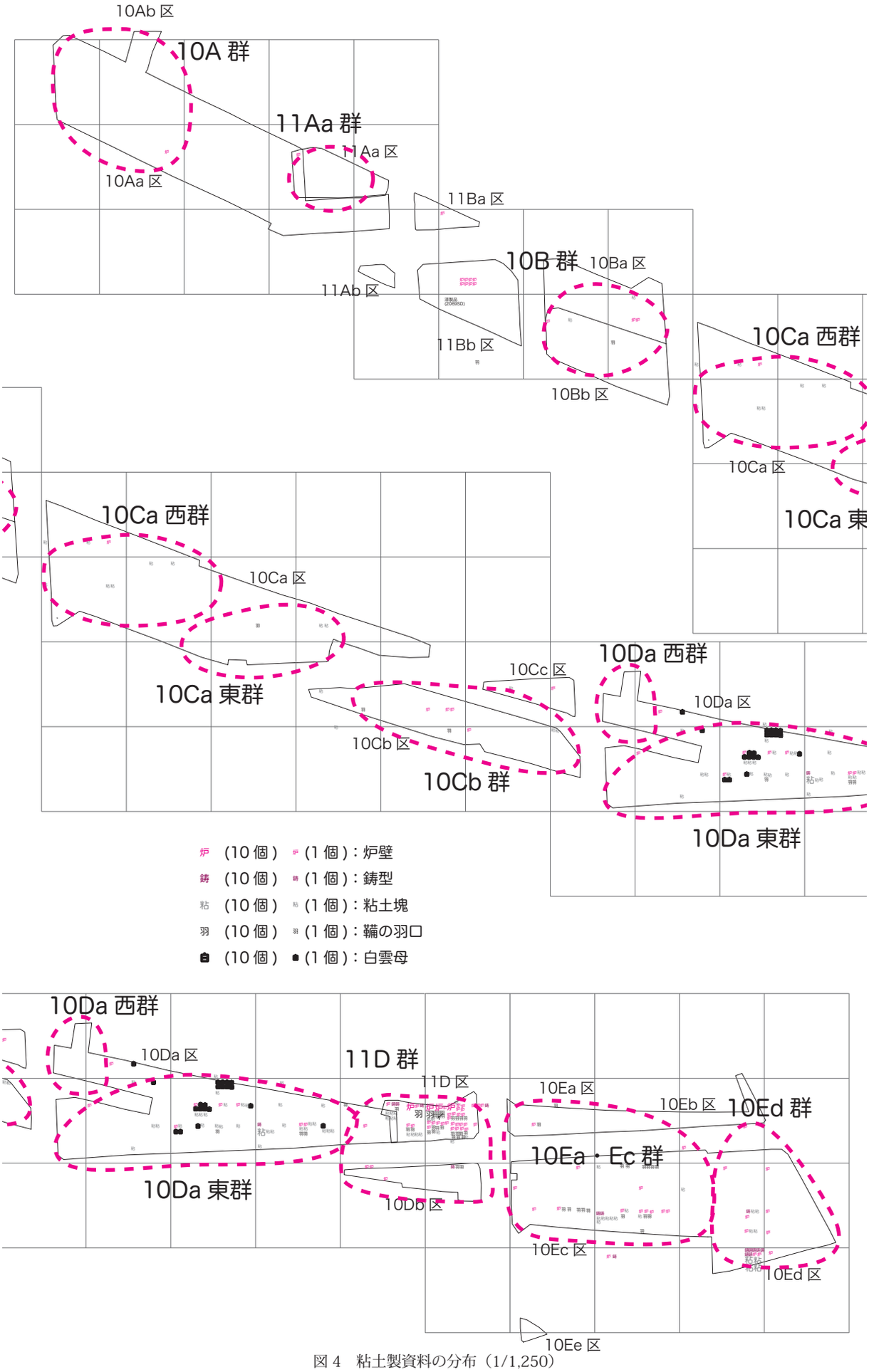


図 4　粘土製資料の分布（1/1,250）

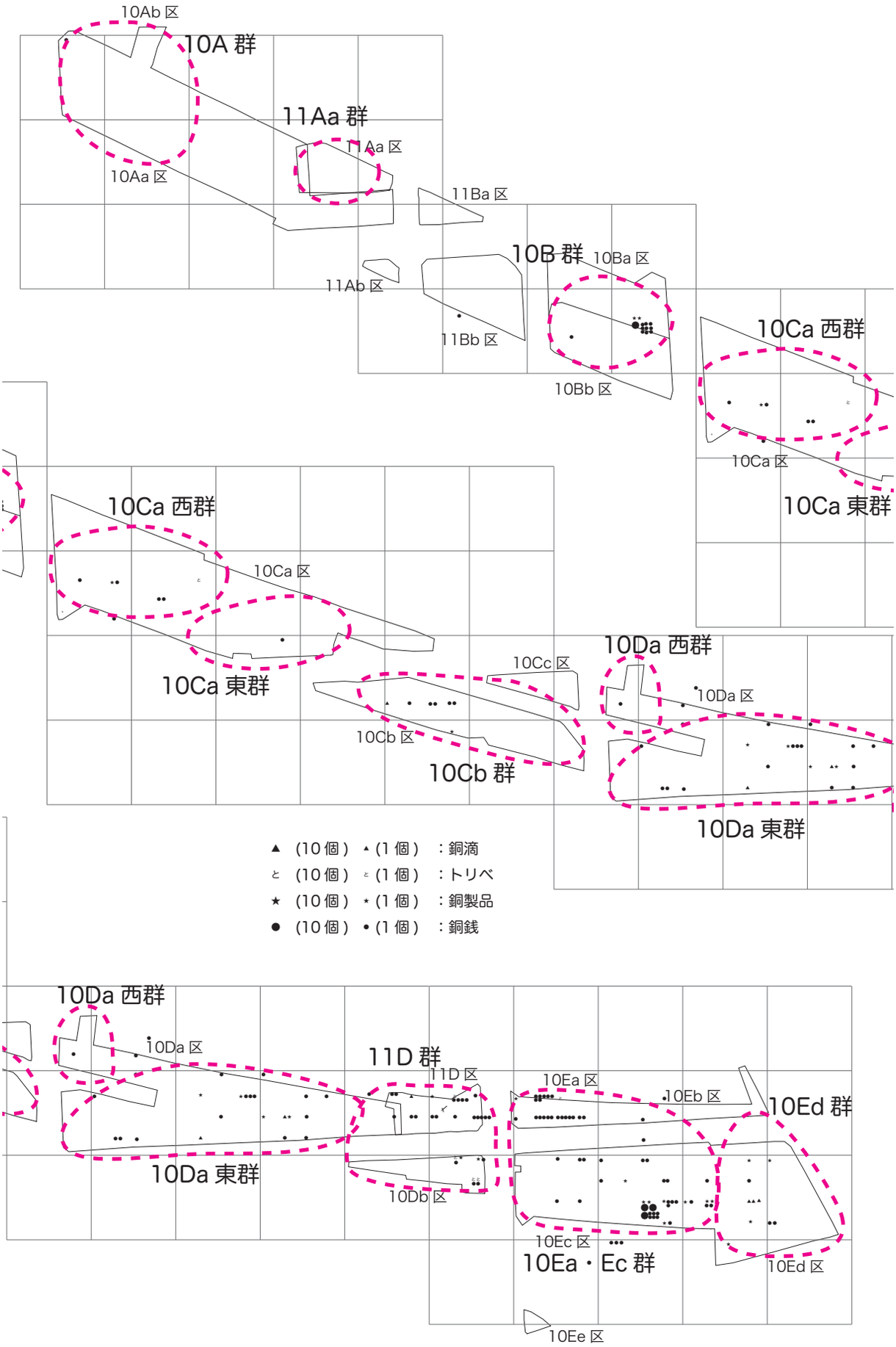


図 5　銅関連資料の分布（1/1,250）

11D 群：11D 区を中心に 10Da 区の東端部から 10Db 区の北側と北東部にひろがる資料群で、椀型滓 260 点、流動滓 A24 点、流動滓 B67 点がある。鍛冶関連資料は 13 世紀後半の 11D 区 1484SE から出土しており、14 世紀後半の時期とされる 1324SK・1460SK・1491SK・1521SK からも出土している。また、15 世紀前半の 1324SK からも出土していることから、13 世紀後半から 15 世紀前半まで続く資料群で、14 世紀後半が中心となるものと考えられる。

鉄関連資料では、鉄製品 19 点、鉄釘 129 点、鉄塊系遺物 8 点、鉄片 1 点、含鉄遺物 120 点がある。鍛冶関連資料と同様に鉄関連資料も多い。

粘土製資料では、鋳型 5 点、鞴の羽口 48 点、炉壁 75 点、粘土塊 16 点があり、粘土製資料が多い。特に鞴の羽口と炉壁が多い。粘土製資料は、鍛冶関連資料の出土分布と相関性がみられ、銅滴とトリベの出土分布は鋳型、炉壁、粘土塊の出土分布とも相関性があるようにみえる。鋳型の時期は、14 世紀後半～末の 11D 区 1460SK、14 世紀後半の 1490SK、14 世紀前半の 1481SK から出土しており、14 世紀に中心があるが、トリベの出土遺構の時期（15 世紀中頃～後半）とは対応しない。

銅関連資料では、銅加工に関連する銅滴は 11D 区の西側に 1 点出土しているが、時期の分かる遺構からは出土していない。トリベは、10Db 区東側で 3 点、11D 区東側で 1 点出土しており、10Db 区の 1 点は 15 世紀中頃の 1264SK から出土している。後に述べる 10Ea 区から出土している 1 点を合わせた 5 点は比較的近在して出土している。銅銭は資料群の分布範囲全体から 23 点出土している。

10Ea・Ec 群：10Ea 区から 10Ec 区にひろがる資料群で、分布の中心は 10Ea 区の中央部から 10Ec 区の中央部にかけての範囲にある。椀型滓 228 点、流動滓 A10 点、流動滓 B10 点がある。鍛冶関連資料は 13 世紀末～ 14 世紀前半の 10Ec 区 0778SD、14 世紀後半の 10Ec 区 0698SE、15 世紀前半～ 15 世紀後半の 10Ea 区 0613SD・0665SK・0670SD・0873SD と 10Ec 区 0289SP・0349SK・0568SK から出土していることから 14 世紀前半から 15 世紀後半にかけて存在した資料群になるものと考えられる。

鉄関連資料では、鉄製品 27 点、鉄釘 219 点、鉄塊系遺物 12 点、鉄片 4 点、含鉄遺物 209 点がある。鉄関連資料は、後に述べる水洗篩別資料の中にも鉄釘や含鉄遺物は多数あり、非常に多い。

粘土製資料では、鋳型 3 点、鞴の羽口 18 点、炉壁 15 点、粘土塊 3 点がある。10Ea 区では炉壁が 1 点出土しているのみで、その他は 10Ec 区から出土している。鍛冶関連資料の出土分布との相関性は 10Ec 区では認められるが、10Ea 区では弱い。

銅関連資料では、トリベが 10Ea 区から 1 点出土しているが、時期の判明する遺構からは出土していない。粘土製資料の鋳型・鞴の羽口・炉壁の出土している 10Ec 区の分布とは対応していない。むしろ西に隣接する 11D 群から出土しているトリベとの関連性が推定される。

銅製品は 10Ea 区北西部から 1 点、10Ec 区中央部から東側に 6 点あり、銅銭も 10Ea 区から 10Ec 区中央部を経て東部に至る範囲にて 79 点出土している。その中で、10Ec 区 110SK から永楽通寶を含む銅銭 35 点が出土しているが、トリベは少し離れて出土している。

10Ed 群：10Ed 区の西側を中心に分布する資料群で、椀型滓が 39 点ある。鍛冶関連資料は 15 世紀中頃～後半の 10Ed 区 1013SK と 1131SD から出土していることから、15 世紀中頃～後半のものになると考えられる。

鉄関連資料では、鉄製品 22 点、鉄釘 47 点、鉄塊系遺物 6 点、鉄片 6 点、含鉄遺物 41 点があり、鉄関連資料は比較的多くみられる。また、後に述べる水洗篩別資料の中に鉄釘や含鉄遺物が多数検出された遺構もある。

銅関連資料では、銅加工に関連する銅滴は 10Ed 区の中央部に 3 点が出土しているが、時期の分かる遺構からは出土していない。銅製品は 10Ed 区中央部から 4 点出土しているが、銅滴はその周辺から少し離れて出土している。銅銭は銅滴の出土した地点の周囲から出土している。

粘土製資料では、鋳型 8 点、炉壁 10 点、粘

土塊 44 点がある。鍛冶関連資料の出土分布との相関性が推定されるが、後に述べる銅滴の出土分布と鋳型、炉壁、粘土塊の出土分布により強い相関性がみられる。鋳型の時期は、15 世紀中頃～後半の 10Ed 区 1013SK・1280SD から出土しており、15 世紀中頃～後半に中心がある。

（2）鍛冶関連資料とその他の資料の関係

鍛冶関連資料と鉄関連資料の関係は、両者の出土分布は比較的類似し、全体的に相関性が推定できることから、鉄関連資料の一部は鉄加工に関わる原料やその生産物であった可能性が考えられる。一方で、鉄関連資料は鍛冶関連資料より出土箇所と出土点数が多いため、鍛冶関連資料よりその分布集中範囲の境界は不明瞭である。

鍛冶関連資料と粘土製資料の関係は、両者の出土分布が 10Ea 区を除いた地点では類似し、出土分布が重なる範囲では出土箇所も対応する地点が多いことから、両者の関係は深いものと思われる。粘土製資料の鋳型の所属時期が判明するものは、鍛冶関連資料の 11D 群や 10Ed 群の中心時期と重なる。

鍛冶関連資料と銅関連資料の関係は、全体の分布傾向は同じであり、11D 区出土のトリベの所属時期が判明するものでは、鍛冶関連資料の 11D 群の中心時期と重なる。銅関連資料の銅製品と銅銭の出土分布は、鍛冶関連資料の出土分布と比較的強い相関性があるが、銅加工に関連する銅滴とトリベの出土分布とは相関性がない。出土した銅製品と銅銭は銅加工の原料ではないと思われる。

銅関連資料と粘土製資料では、銅滴やトリベの出土分布が鋳型の出土分布と比較的相関性がみられるが、炉壁と粘土塊の出土分布と対応するのは 10Ed 区と 11D 区だけで、その他の地点では対応していない。10Ed 区では銅滴と鋳型、炉壁、粘土塊の出土分布と出土地点が重なっており、鍛冶関連資料より相関性が強いものと思われる。

これらのことから、鍛冶工人と銅加工の工人は比較的近い場所で同時期に存在した可能性が高いものと考えられる。

その他に白雲母片は、鍛冶関連資料の 10Da 東群の出土分布範囲と重なる。

（3）鍛冶工房・工人の操業スタイル

次に、金属関連資料の出土分布の中心として考えた鍛冶関連資料について、その出土分布と資料の出土点数からその操業スタイルを検討したい。各資料群は鉄滓の出土点数とその分布密度から大きく二つのタイプにわけられる。

一つは半径 20m 程の範囲から 100 点以上の椀型滓を主体とする鉄滓が集中的に出土する資料群で、10Da 東群・11D 群・10Ea・Ec 群が該当する。これらの資料群では、鉄滓が多数の遺構・地点から出土しており、中世の下津宿遺跡が盛んに営まれる 13 世紀後半から 15 世紀後半に至る 200 年余の期間に、連続して営まれた結果が反映しているものと思われる。

もう一つは、鉄滓が数点から数十点出土している資料群である。鉄滓が数点出土しているのみの 11Aa 群・10B 群・10Ca 東群・10Da 西群から、30 点の出土のある 10Cb 群や 39 点の出土がある 10Ed 群まで、出土点数には幅がある。このタイプの資料群で時期が限定できるものは、比較的短期間の操業が推定される特徴がある。このタイプも一定の範囲から鉄滓が出土しているが、鉄滓が 7 点の出土である 11Aa 群の出土範囲は半径 5m 程の比較的狭い反面、鉄滓が 30 点の出土している 10Cb 群の出土範囲は半径 20m 程で比較的広くなるなど、鉄滓の出土点数と出土範囲には緩やかな関係がうかがえる。

以上の出土傾向から、前者と後者を比較すると、鉄滓の出土範囲の違いは比較的少なく、出土点数に大きな違いが見られる点から、前者は鍛冶の連続性があり、生産規模が比較的大きい「定住職人」的鍛冶工房・工人、後者は鍛冶の連続性が少なく、生産規模が比較的小さい「移動（渡り）職人」的鍛冶工房・工人姿が想定できるであろうか。

遺構埋土の水洗篩別による抽出資料

次に遺構の土壌から水洗篩別により抽出された微細遺物の分析を行う。微細遺物の抽出に用いた篩の目は 2mm である。今回分析を行なった土壌を採取した遺構の時期については、特定

できない遺構も多いが、これらは大きく鎌倉時代から室町時代にかけて（13 世紀後半～ 15 世紀後半）の遺構と考えられる。

（1）平成 22 年度発掘調査資料

平成 22 年度の調査において、遺構などの埋土の中に微細遺物などが含まれる土壌から抽出した資料で、遺跡から土嚢袋などで取り上げた土壌サンプル毎に一つの登録番号（X － 1 ～ X286）を付けて保管されている。この土壌サンプル毎の抽出資料を遺構や地点毎にまとめたのが表 2 である。

土壌水洗篩別により抽出された資料は多量にある。このうち、炭化米、炭化木材･炭化竹材、炉壁、粘土塊・土師器片、土師器片に関しては重量を計測した。炭化木材と炭化竹材、粘土塊と土師器片は混在して抽出されており、区別が困難であったため、同一のサンプルとして保管した。また、鉄（鉄釘･含鉄遺物など）、炭化物、骨（貝殻を含む）、銅（銅銭など）は個数を計測し、白雲母片は有無を確認した。

炭化米は 10Ec 区 171SK から 16.5g、248SK から 45g が検出された。炭化米とは別に炭化物があり、これはほとんどが炭化種実であった。炭化物が少量確認された遺構・地点は多いが､10Da 区 130SK（上層～下層）･600SK（上層･下層）、10Ec 区 1192SK・170SK 下層・171SK 下 層・248SK、10Ed 区 1193SK・SP1 の 8 遺構からは 100 点以上、10Ec 区 170SK 下層・171SK 下層・248SK、10Ed 区 1193SK からは 5000 点以上の炭化種実が確認された。このうち 10Ec 区 170SK のサンプル X-180 の炭化物 1117 点について種類を同定・計測したところ、炭化米塊 69 点、炭化米 861 点、コムギ 91 点、オオムギ 96 点であった。炭化米塊は多数の炭化米が固着したものであるので、炭化米の点数はさらに増える。このサンプル X-180 を参考に炭化種実の構成を考えると、98％以上は炭化米で、炭化コムギと炭化オオムギはそれぞれ 1％未満になる。

炭化木材・炭化竹材は 10Da 区 130SK（上層～下層）、10Ec 区 171SK・248SK・1192SK から検出されており、0.2g ～ 39.5g がある。重量としては少ないが、どの遺構からも炭化木材とともに小径の竹材が含まれる点が興味深い。

炉壁は 10Da 区 130SK 上層より 91g が抽出された。粘土塊・土師器片、土師器片は 10Da 区 130SK（上層～下層）･同 600SK（上層･下層）･10Ec 区 171SK・同 248SK・10Ed 区 1192SK・同 SP1 から多量に確認できた。これらの遺構からは、遺物としての土師器が多量に出土する遺構である。

鉄は鉄釘と棒状や塊状の含鉄遺物がほとんどで、少量確認された遺構・地点も多いが、10Da 区 130SK（上層～下層）・600SK（上層・下層）、10Ec 区 171SK・248SK、10Ed 区 1193SK からは 100 点を超える資料が確認された遺構もある。銅は 10Da 区 600SK 下層・10Ec 区 248SK・10Ed 区 1193SK から少量の銅製品か銅銭の破片が確認された。

骨は貝殻と魚類などの動物を含んだもので、少量確認された遺構・地点が多いが 10Ca 区 820SK・ 同 901SP・10Ec 区 716SK から 100 点以上確認できた。詳細は後に述べる。

以上の結果、10Da 区 130SK（上層～下層）・600SK（上層・下層）、10Ec 区 171SK・248SK、10Ed 区 SP1 の 5 つの遺構では、多量の炭化米・炭化物と粘土塊・土師器片、鉄釘、含鉄遺物に少量の骨が伴って出土していることが明らかとなり、下津宿遺跡の一つの特徴を示すものと考えられる。また 10Da 区 600SK・729SK・1440SD・検出 2・検出 3 などの遺構・地点にみられる白雲母片は鉄資料（含鉄遺物か）や骨と少量ずつ伴うことが読み取れる。

（2）平成 23 年度発掘調査資料

平成 23 年度調査における遺構から抽出した資料も、平成 22 年度の資料と同様に、登録番号（X － 287 ～ X385）を付けて保管されている。この土壌サンプル毎の抽出資料を遺構や地点毎にまとめたのが表 3 である。

鍛冶関連遺物・鉄製品・含鉄遺物は 11D 区のほとんどの遺構から出土している。その中で、鍛造剥片が検出された遺構では、錆が付着して茶褐色を呈する鍛造剥片様遺物が比較的多く確認される。11D 区 1060SK・1324SK・1460SK などのように椀型滓の細片と思われるその他の滓が多数みつかる遺構からは鍛造剥片・鍛造剥片様遺物・流状滓・鉄製品・含鉄遺物が比較的多く伴う。

表２　平成 22 年度発掘調査分の土壌水洗篩別資料一覧

調査区	グリッド	遺構	層位	時期	炭化米(g)	炭化木材・炭化竹材(g)	炉壁(g)	粘土塊・土師器片(g)	土師器片(g)	鉄(M、個数)	炭化物(P、個数)	骨(B、個数)	銅（C、個数	その他
10Aa	5D18j	002SK										ウマ臼歯破片1		X-240
10Aa	5D19k	070SD		13世紀中頃								ウマ臼歯破片1、哺乳綱不明破片1		X-241・X-242
10Aa	5D18f	検出2										ウマ？歯破片1		X-243
10Ab	5D15g	検出1								32				X-257、ベンガラが少量あり
10Bb	6E6f	190SK								2				X-258、雲母片あり
10Ca	6E10o	1961SE										アカニシ殻軸破片・体層破片1個体？		X-252.貝、凝灰岩砥石1.北部系山茶碗1
10Ca	6E12f	820SK										右殻87、ハマグリ左殻1		X-249、貝、土師器小皿2.山茶碗1
10Ca	6E12t	820SK										ヤマトシジミ左殻67・右殻77		X-250、貝
10Ca	6F13b	901SP										ヤマトシジミ左殻1168・右殻1152、ハマグリ左殻35・右殻46、シオフキ左殻2・右殻4、マガキ左殻3・右殻2、アラムシロ1、ウミニナ科殻軸2、フジツボ類殻破片1、タイ科尾椎1		同一サンプルからでX-40～X-50・X-244・X-251、ヤマトシジミが中心、詳細は別
10Da	6G18i	130SK	上層	15世紀前半～中頃		0.2	91	4500		442	103	タイ科歯1、不明破片3		X-1～X-3・X-51～X-75
10Da	6G18i	130SK	中層			11.5		1065		184	176			X-4・X-5・X-79～X-91、ガラス小玉1点あり
10Da	6G18i	130SK	下層			8.8		811		381	213	タイ科歯1、哺乳綱不明破片1		X-6～X-8・X-76～X-78・X-92～X-125、白雲母微量あり
10Da	6G19h	163SK		14世紀後半						1				X-259、雲母片あり
10Da	6G17f	200SK		15世紀後半						2				X-260、雲母片あり
10Da	6G18h	600SK	上層	14世紀後半～15世紀後半				2000	9.5	569	111	タイ科歯2、硬骨魚綱？左？角骨？1、哺乳綱不明破片3、不明破片5		X-9～X-11・X-126～X-151、白雲母0.7g
10Da	6G18h	600SK	下層					730	20.5	205	64	タイ科歯1、不明破片6	1	X-12・X-13・X-152～X-176
10Da	6G19f	707SK		14世紀前半						3				X-261、雲母片あり
10Da	6G18e	719SK								6				X-262、雲母片あり
10Da	6G19f	726SK								3				X-263、雲母片あり
10Da	6G17g	892SK								14				X-264、雲母片あり
10Da	6G18f	925SK								3				X-265、雲母片あり
10Da	6G18f	925SK	東西トレンチ							1				X-266、雲母片あり
10Da	6G17d	1256SK										アカニシ殻軸3		X-253、貝
10Da	6G18t	1426SK								3				X-267、雲母片あり
10Da	6G19e	1440SD		14世紀後半						1				X-269、雲母片あり
10Da	6G17e	1671SK								10				X-268、雲母片あり
10Da	6G17g	1676SK										アカニシ殻軸2		X-254、貝
10Da	6G17f	検出2								1				X-270、雲母片あり
10Da	6G18f	検出2								3				X-271、雲母片あり
10Da	6G18f	検出2								1				X-272、雲母片あり
10Da	6G17f	検出2								2				X-273、雲母片あり
10Da	6G18h	検出2								4				X-274、雲母片あり
10Da	6G19f	検出2								3				X-275、雲母片あり
10Da	6G19f	検出2								1				X-276、雲母片あり
10Da	6G17i	検出3								3				X-277、雲母片あり
10Da	6G17f	検出3								5				X-278、雲母片あり
10Da	6G19d	検出3								2				X-279、雲母片あり
10Da	6G18k	検出3								1				X-280、雲母片あり
10Da	6G19e	検出3								1				X-281、雲母片あり
10Ea	6H19b	246SK										哺乳綱不明破片2		X-245
10Ea	6H19c	632SK		15世紀後半								タイ科尾椎1		X-246
10Ec	7H3i	1192SK								88	743			X-212・X-213
10Ec	7H3i	170SK	下層							12	8147			X-177～X-182、X-180の炭化物1117点の内訳は米塊69点、米861点、コムギ91点、オオムギ96点
10Ec	7H3i	171SK	下層							213	21787			X-183～X-192
10Ec	7H3i	171SK			16.5	6.1		2006.8						X-14～X-18、陶器片少量含む、他に鉄釘33点
10Ec	7H3i	248SK	下層	15世紀前半						89	7072	硬骨魚綱椎骨1・不明破片1、不明破片1		X-193～X-195
10Ec	7H3i	248SK			45	39.5		6790.6		471	17491	哺乳綱不明破片4、不明破片2	9	X-19～X-28・X-196～X-211、X-200より粒状鉄滓1点あり、陶器片少量含む、他に鉄釘118点
10Ec	7H2b	665SK		15世紀後半							1			X-282、種
10Ec	7H2b	665SK	下層									イヌ？腰椎1、アカニシ殻軸破片・体層破片2個体？		X-255、貝
10Ec	7H3d	698SE	井戸枠内	14世紀末							2			X-283、種
10Ec	7H2f	716SK										哺乳綱不明破片292		X-247
10Ec	7H2b	901SE	井戸枠残骸								1			X-284、種
10Ec	7H2b	901SE										アカニシ殻軸1		X-256、貝
10Ec	7H3g	検出	1g層								12			X-285、種
10Ec		排土										ウマ臼歯破片1		X-248
10Ed	7H3l	1192SK			86.1			11350.5						X-29・X-30・X-31～X-37、陶器片少量含む、炭化材を含む
10Ed	7H3i	1193SK								595	62742	貝類殻破片1、タイ科歯3、硬骨魚綱前上顎骨or歯骨1・椎骨2・不明破片2、不明破片7、不明歯1	2	X-214～X-234、X-218より粒状鉄滓1点、X-219より雲母片1点あり
10Ed	7H3l	1193SK		15世紀後半							80			X-286、炭化米、他に鉄釘191点
10Ed	7H3l	SP1						532.9		70	234	アカニシ？殻破片43		X-38・X-39・X-235～X-239、陶器片少量含む

表３　平成 23 年度発掘調査分の土壌水洗篩別資料一覧

調査区	グリッド	遺構番号	層位等	時期	鍛造剥片	鍛造剥片様遺物	粒状滓	その他の滓	鉄製品・含鉄遺物	銅	骨	炭化木材	炭化物・炭化種実	備考
11Bb2	6E5d	2053SK											炭化オオムギ2	X-287、不明3点
11D	6G19r	1060SK	東アゼ		7	28	1	145	2		タイ科歯1、不明破片1			X-288
11D	6G19r	1060SK	北アゼ		3	33	3	156	4				不明炭化物1.炭化米1.炭化物5	X289
11D	6G19r	1060SK	南アゼ			3		10	5					X-290、炉壁1点
11D2	6G18p	1094SK			4	36	3	52	13			1	炭化オオムギ？1	X-291～X-293
11D3	6G19o	1306SK	北東			2		2					炭化米？1	X-294
11D3	6G19o	1306SK	北西					1					炭化米1	X-295
11D3	6G19o	1306SK	南東					1					炭化米1	X-296
11D3	6G19o	1306SK	南西			3						1		X-297
11D3	6G19o	1307SK	北西			4		1					炭化米２.炭2	X-298
11D3	6G19o	1307SK	南東		1	9		16			不明破片1		炭化米15.炭化アズキ？5.不明炭化物68	X-299
11D3	6G18p	1324SK		15世紀中頃	9	21	2	228				1	炭化ムクロジ？1.不明植物1.炭化物1.炭化種子8	X-300・X-301
11D4	6G19r	1414SK				5		6	104～多くは鍋か			1		X-302・X-303
11D4	6G18q	1460SK	上層	14世紀末	3	47	20	466	157	6	タイ科歯6、硬骨魚綱右角骨1・不明破片2、哺乳綱不明破片11、不明破片2	2	炭化種子1.炭化物9	X-305～X-310
11D4	6G18q	1460SK	下層		8	68	34	795	179	3	哺乳綱不明破片4、不明破片2	16	炭化物4	X-311～X-320、雲母片3点
11D4	6G18q	1460SK			17	41	15	116	19	不明製品2		2		X-304・X-321
11D4	6G18p	1490SK		14世紀後半		22	4	576	177		タイ科歯4、マグロ/カツオ類？尾椎？1、硬骨魚綱椎骨2・不明破片6、哺乳綱不明破片33、不明破片29	444		X-322～X-345
11D4	6G19p	1491SK		14世紀後半		5	3	181	129	銅銭1	タイ科歯6、硬骨魚綱不明破片32、不明破片25	29		X-346～X-348、土器片2点
11D4	6G19p	1493SK			5	37	6	87	218	銅銭片4	サメ類椎骨1、タイ科歯2、硬骨魚綱前上顎骨or歯骨1・腹椎1・椎骨2・不明破片35、哺乳綱不明破片8	27		X-349～X-354
11D4	6G19p	1494SK		14世紀後半	1	5		28	14		硬骨魚綱不明破片1	2		X-355～X-357、雲母片2点、土器片1点
11D4	6G19p	1496SK		13世紀末～14世紀前半	10	23	2	72	73		エイ類椎骨1、硬骨魚綱歯1・椎骨4・不明破片36、哺乳綱不明破片2、不明破片9	33		X-358～X-361、土器片2点
11D4	6G19p	1497SK			3	37	5	69	77		タイ科歯13、硬骨魚綱前上顎骨or歯骨2・椎骨1・不明破片37、硬骨魚綱？不明破片2、哺乳綱？不明破片4、不明破片6	35		X-362～X-367、土器片2点、粘土塊1点
11D4	6G18p	1499SK				6	3	71	30		硬骨魚綱不明破片2、不明破片1	23		X-368・X-369
11D4	6G18o	1507SK		15世紀前半	1	4		18	12		不明破片4	14		X-370・X-371、土器片4点
11D4	6G19p	1517SK		14世紀後半	2	5	5	12	26		硬骨魚綱歯1、不明破片4	8		X-372・X-373
11D4		1521SK		14世紀末		24	7	101	48	元豊通寶1	タイ科歯3、コイ科椎骨1、硬骨魚綱不明破片15、不明破片11	46		X-374～X-377
11D4		1523SK		14世紀後半	1	2	3	23	25		タイ科歯1、硬骨魚綱不明破片3、不明破片18	20		X-378～X-380、雲母片1点
11D4	6G18q	1537SK			8	17	10	117	24		タイ科歯1			X-381～X-384、雲母片1点
11D4	6G18r	1539SK						12			1			X-385

銅は11D区1460SK・1491SK・1493SK・1521SKから出土しており、銅製品や銅銭の破片が少量確認される。

骨は11D区の多くの土坑から1点～89点の資料が確認された。比較的炭化木材の入る遺構から確認できており、これらの骨が、焼けたことにより残存した可能性がある。資料の詳細については後に述べる。

炭化物・炭化種実は11Bb区2053SKから炭化オオムギ2点、11D区1060SKから炭化米1点、不明炭化物が6点、11D区1306SKから炭化オオムギ？1点、炭化米3点、11D区1307SKから炭化米17点、炭化アズキ？5点、不明炭化物68点、11D区1324SKから炭化ムクロジ？1点、不明炭化種子10点、11D区1460SKから不明炭化種子1点が確認された。11D区1307SKから炭化アズキと思われる種子が検出されたことが注目される。

その他では白雲母片が11D区1460SK・1494SK・1523SK・1537SKが1点～3点確認された。（蔭山誠一）

（3）動物遺体の分析

先に骨・貝殻などとして述べた動物遺体には、貝類、甲殻類、魚類、哺乳類がある。以下、出土した動物遺体について記す（表2～4参照）。

a. 腹足綱

アカニシは、10Ca区1961SE、10Da区1256SK・1676SK、10Ec区665SX・901SEで出土した。1961SEではおそらく1個体分、1256SKでは1個体分、1676SKでは2個体分、665SXではおそらく2個体分、901SEでは1個体分が見られた。また、10Ed区SP1でアカニシの可能性がある貝殻片複数が出土した。大型の巻貝で、浅海の砂泥地に生息する。食用となる。

アラムシロは10Ca区901SPで1点が出土した。小型の巻貝で、河口域や干潟に生息する。一般的に食用とされないが、当時の扱われ方は不明。

ウミニナ科は10Ca区901SPで2点が出土した。ウミニナ科は、ウミニナやホソウミニナなどを含む小型の巻貝で、河口域や干潟に生息する。食用となる。

b. 二枚貝綱

ヤマトシジミは動物遺体の中で最も多く見られた。出土遺構は10Ca区820SK・901SPである。820SKで、左殻が135点、右殻が164点見られた。901SPで左殻が1168点、右殻が1152点見られた。河口域など汽水域の砂泥地に生息する。食用となる。

ハマグリは動物遺体の中でヤマトシジミに次いで多く見られた。出土遺構は10Ca区820SK・901SPである。820SKでは左殻1点が見られた。901SPでは左殻35点、右殻46点が見られた。内湾の砂泥地に生息する。食用となる。

シオフキは10Ca区901SPで、左殻2点、右殻4点が見られた。内湾の砂泥地に生息する。食用となる。

マガキは、10Ca区901SPで、左殻3点、右殻2点が見られた。岩礁、河口や内湾の砂泥地に形成されるカキ礁などに生息する。食用となる。

c. 顎脚綱

フジツボ類は10Ca区901SPで破片1点が見られた。食用となるが、他の貝に付着して遺跡に持ち込まれた可能性もある。

d. 軟骨魚綱

エイ類は11D区1496SKで焼けた椎骨1点が見られた。食用となる。

サメ類は11D区1493SKで焼けた椎骨1点が見られた。食用となる。

表4　分類群一覧

軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
アカニシ	*Rapana venosa*
アラムシロ	*Reticunassa festiba*
ウミニナ科の一種	Batillariidae gen. et sp. indet.
二枚貝綱	Class Bivalvia
ヤマトシジミ	*Corbicula japonica*
ハマグリ	*Meretrix lusoria*
シオフキ	*Mactra veneriformis*
マガキ	*Crassostrea gigas*
節足動物門	Phylum Arthropoda
顎脚綱	Class Maxillopoda
フジツボ亜目の一種	Balanomorpha fam., gen. et sp. indet.
脊索動物門	Phylum Vertebrata
軟骨魚綱	Class Chondrichthyes
エイ亜区の一種	Batoidea ord., fam., gen. et sp. indet.
サメ亜区の一種	Selachii ord., fam., gen. et sp. indet.
硬骨魚綱	Class Osteichthyes
コイ科の一種	Cyprinidae gen. et sp. indet.
タイ科の一種	Sparidae gen. et sp. indet.
哺乳綱	Class Mammalia
ウマ	*Equus caballus*

e. 硬骨魚綱

コイ科は 11D 区 1521SK で焼けた椎骨 1 点が見られた。コイ科は、淡水産のコイ、フナ、ウグイなどを含み、食用となる。

タイ科は、10Ca 区 901SP、10Da 区 130SK・600SK、10Ea 区 632SK、10Ed 区 1193SK、11D 区 1060SK・1460SK・1490SK・1491SK・1493SK・1497SK・1521SK・1523SK・1537SK で出土した。10Ca 区 901SP で尾椎 1 点、10Da 区 130SK 上層で歯 1 点、同下層で歯 1 点、600SK 上層で歯 2 点、同下層で歯 1 点、632SK で尾椎 1 点、1193SK で歯 3 点、1060SK で歯 1 点、1460SK で歯 6 点、1490SK で歯 4 点、1491SK で歯 6 点、1493SK で歯 2 点、1497SK で歯 13 点、1521SK で歯 3 点、1523SK で歯 1 点、1537SK で歯 1 点が見られた。タイ科は、海産のマダイ、チダイ、クロダイ、キダイなどを含み、食用となる。

その他、マグロ・カツオ類の尾椎の可能性がある焼けた椎骨破片 1 点が 11D 区 1490SK から出土した。

f. 哺乳綱

ウマは、10Aa 区 002SK・070SD から臼歯破片が各 1 点出土した。10Ec 区の排土からもウマ臼歯破片が出土しているが、遺跡とは別の時期の可能性がある。ウマは、乗用、運搬用、農耕用などの用途が考えられる。

その他、イヌの可能性がある腰椎 1 点が、10Ec 区 665SX 下層から 1 点出土した。

g. 小結

動物遺体の分布傾向を見ると、調査区西側の 10Aa 区ではウマのみ、中央の 10Ca 区では圧倒的に多量のヤマトシジミにやや多くのハマグリやその他の貝類や魚類が伴う点が特徴で、東側の 10Da・10Ea・10Ec・10Ed では魚類やアカニシが目立つといった特徴がある。分布傾向の差は地点間での動物利用の差を示している可能性がある。（中村賢太郎）

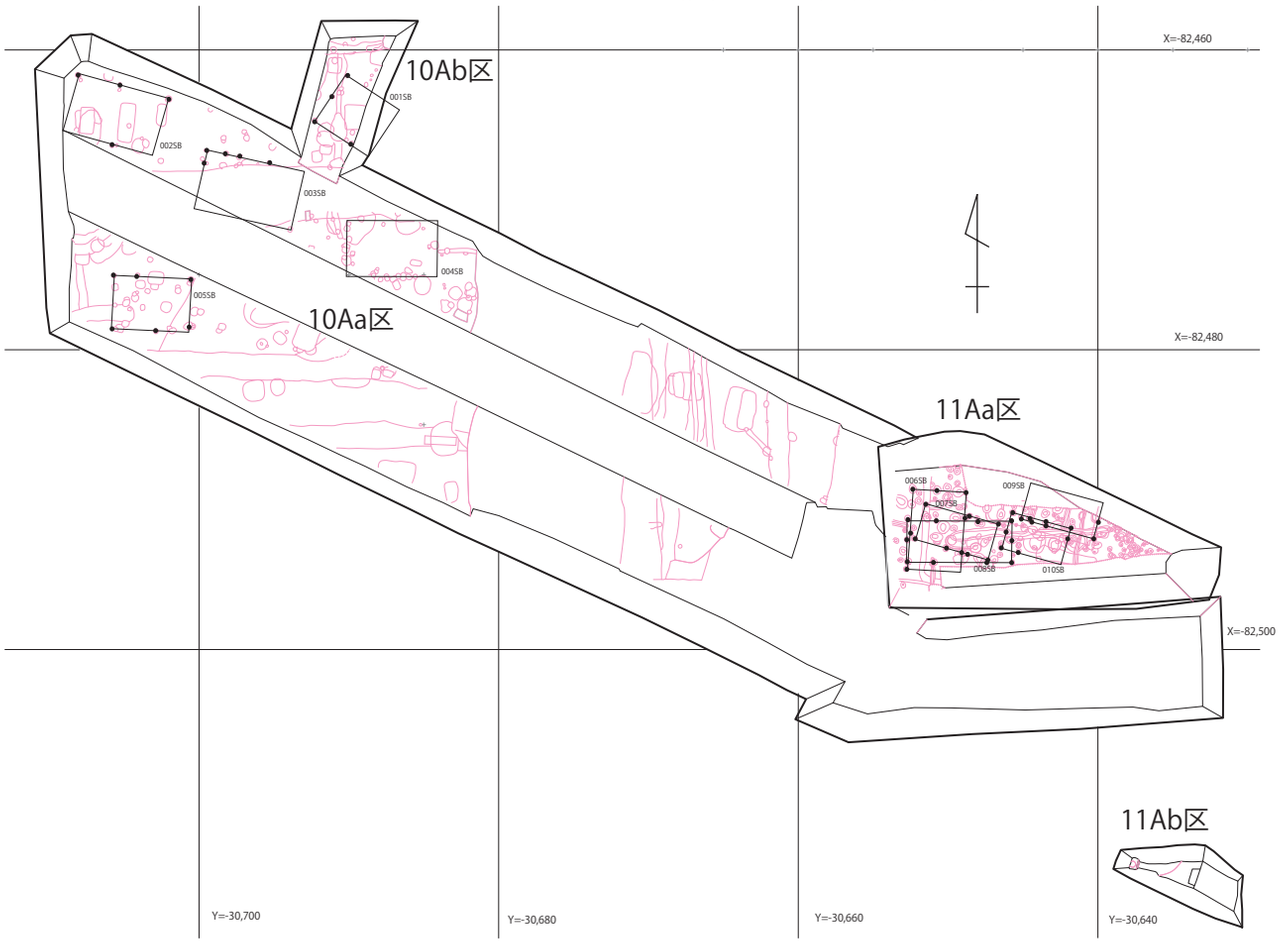


図 6　掘立柱建物跡の復元案（10Aa・10Ab・11Aa・11Ab 区　1/500）

掘立柱建物跡の検討

下津宿遺跡で確認された遺構には多数の柱穴が存在するが、報告書では掘立柱建物跡を十分に推定復元するには至っていないので、ここで改めて検討することにしたい。

（1）掘立柱建物跡の復元の方法

今回実施した掘立柱建物跡の推定復元は、既に紹介されている遺構図上で柱穴と思われる遺構が方形に配列する箇所を見出して想定した。建物跡は基本的には側柱建物が主体となると思われ、方形の配列に6割以上柱穴が残存するものを抽出した。この結果、少なくとも160棟の建物跡を想定することができた（図6～10）。この想定は、遺構が密集する部分での柱穴の特定が難しいことや、柱穴の形状や特徴および出土遺物などを今回ほとんど考慮せずに復元したことなどの問題点があり、各柱穴が同時存在していない可能性も考えられる。また、最も重要な建物跡の時期については、床面が事実上特定できないために柱穴の埋土出土遺物のみが唯一の手がかりであるが、現地での遺構の切り合いと出土遺物が合致しない事例が多くある現状では特定することは難しい（今回では時期の特定を断念した）。考察に際しては、これらの点を十分に注意する必要があることをあらかじめ付記しておきたい。

（2）掘立柱建物跡の分類

さて、推定復元された掘立柱建物跡のうち桁行と梁行の規模が特定される140基について平面規模による分類を試みた。掘立柱建物跡の桁行と梁行の長さの分布をグラフに示した（図11）結果、建物規模から7類11種に区分できた（具体的な事例を図12に示した）。

A類（特小形）桁行・梁行ともに3m以下のもの。10Da区で1棟のみ確認された。

B類（小形）桁行が3～7m、梁行が2～6mとなるもの。やや強引だが3種に細別される。

B 1類：概ね桁行が3～5m、梁行が2～5mとなるもの。B区以東で37棟確認された。

B 2類：概ね桁行が4.5～7m、梁行が2～4.2mとなるもの。ほぼ全域で33棟確認された。

B 3類：概ね桁行が4.5～7m、梁行が4.2～6mとなるもの。CD区を中心に16棟確認された。

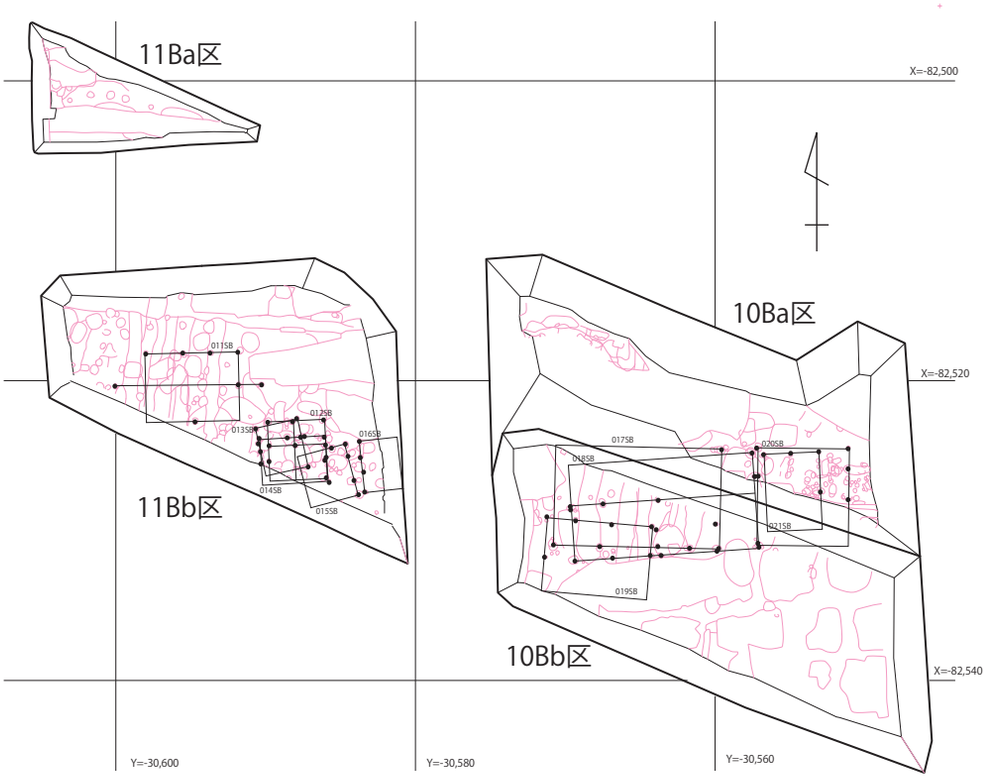


図7　掘立柱建物跡の復元案（10Ba・10Bb・11Ba・11Bb区　1/500）

図８　掘立柱建物跡の復元案（10Ca・10Cb・10Cc 区　1/500）

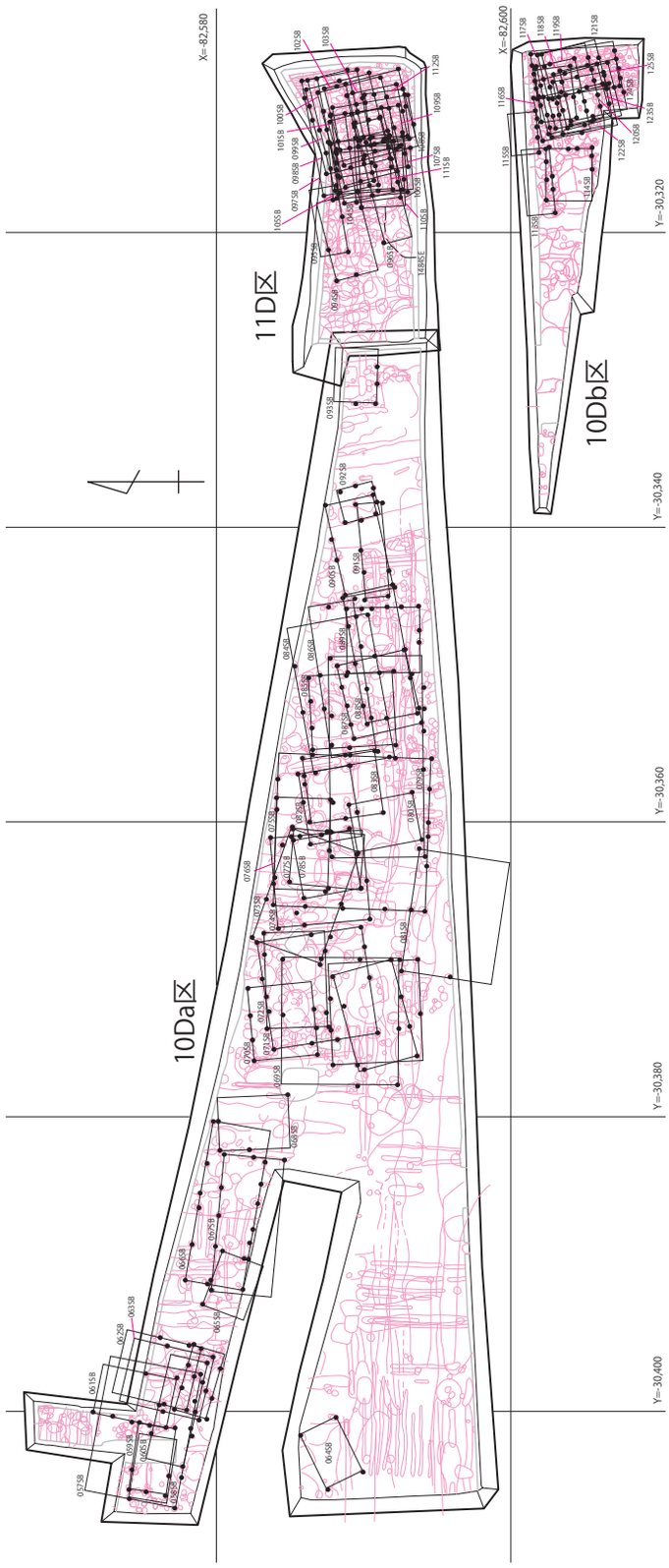


図９　掘立柱建物跡の復元案（10Da・10Db・11D 区　1/500）

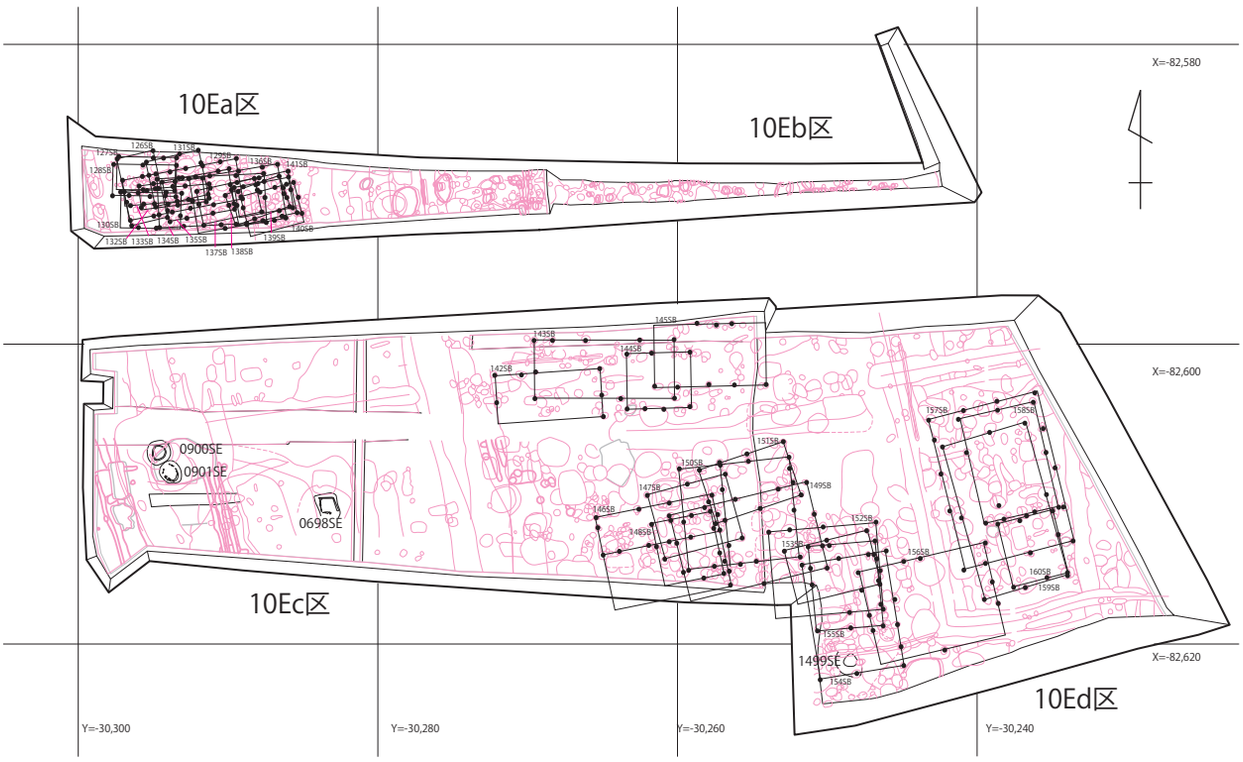


図 10　掘立柱建物跡の復元案（10Ea・10Eb・10Ec・10Ed 区　1/500）

C 類（狭い中形）桁行が 5 ～ 9m、梁行が 4.5m 以下のもの。DE 区を中心に 14 棟確認された。

D 類（広い中形）桁行が 6 ～ 9m、梁行が 4.5m 以上のもの。C ～ E 区で 16 棟確認された。

E 類（大形）桁行が 10 ～ 12m となるもの。やや強引だが 3 種に細別される。

E 1 類：梁行が 4m 以下となるもの。10Da 区で 2 棟確認された。

E 2 類：梁行が 5 ～ 7m となるもの。C ～ E 区で 7 棟確認された。

E 3 類：梁行が 7m 以上となるもの。C ～ E 区で 5 棟確認された。

F 類（特大形）桁行が 12 ～ 15m となるもの。10Ca 区を中心に 7 棟確認された。

G 類（超大形）桁行が 15m 以上、梁行が 10m 以上のもの。10Ca 区と 10Cb 区にまたがる形で抽出したもの 1 棟のみがこれに該当するが、この復元案が適切か否かは疑問が残る。

これらの建物跡は、前述した通り概ね側柱建物であるが、一部に間仕切りなど特殊な構造が確認されたものも存在する。11Bb 区に所在する 011SB は側柱の外側に棟持柱を想定できる建物跡である。また、11Bb 区 012SB、10Bb 区 018SB、10Ca 区 030SB、11D 区 097SB、11D 区 102SB、10Ec 区 146SB、10Ec 区 150SB は内部に間仕切りが確認されたものである。なお、今回の復元では総柱建物の存在は確認できなかった。

（3）掘立柱建物跡の分布

次に、掘立柱建物跡の分布を上記分類別に検討する。建物跡の分布を模式図的に表現したのが図 13 である。この結果、建物規模は地点によって異なることが明らかとなった。しかも遺構図を詳細に見ると、同種の建物跡が繰り返し建て替えられている様子が判明する。以下、具体的に説明する。

建物分布 1 ：10 A a 区から 11 B a 区にかけてはＢ 2 類が大半を占めており、大形の建物跡は存在しない。この分布はさらに建物分布 1 a（10Ab 区北西部）と建物分布 1 b（11Aa 区と 11Bb 区南部）に細分することができる。

建物分布 2 ：10Ba 区から 10Ca 区西半部ではＢ 3 類とＤ類とＦ類が多く分布する。特に建物分布 2 b（10Ca 区西半部）で建物跡の重複が激しく認められるが、建物分布 2 a（10Ba 区と

表５　掘立柱建物跡一覧

遺構番号	調査区	桁行（間）	梁行（間）	桁行（m）	梁行（m）	分類
001SB	10Ab	(2)	2	(3.0)	3.8	-
002SB	10Aa	2	1	6.2	3.5	Ｂ２類
003SB	10Aa	4	1	6.6	4.0	Ｂ２類
004SB	10Aa	2	1	5.8	3.4	Ｂ２類
005SB	10Aa	2	1	5.2	3.6	Ｂ２類
006SB	10Aa	3	2	5.3	3.6	Ｂ２類
007SB	11Aa	2	1	4.9	2.4	Ｂ２類
008SB	11Aa	3	2	7.0	2.8	Ｃ類
009SB	11Aa	2	(1)	4.8	(2.0)	-
010SB	11Aa	4	(1)	5.9	(2.0)	-
011SB	11Bb	3	2	6.2	4.6	Ｂ３類
012SB	11Bb	3	2	3.9	3.6	Ｂ１類
013SB	11Bb	2	1	3.2	3.0	Ｂ１類
014SB	11Bb	3	2	4.4	3.1	Ｂ１類
015SB	11Bb	3	(1)	3.5	(1.0)	-
016SB	11Bb	2	(1)	3.4	(1.0)	-
017SB	10Bab	5	2	11.0	5.4	Ｅ２類
018SB	10Bab	4	2	12.2	5.4	Ｆ類
019SB	10Bab	3	(1)	5.8	(3.0)	-
020SB	10Bab	2	1	5.3	4.9	Ｂ３類
021SB	10Bab	(1)	2	(3.2)	3.6	-
022SB	10Ca	4	5	10.3	8.2	Ｅ３類
023SB	10Ca	4	4	7.2	5.8	Ｄ類
024SB	10Ca	4	4	10.8	6.3	Ｅ２類
025SB	10Ca	3	2	5.8	4.8	Ｂ３類
026SB	10Ca	3	2	6.7	6.0	Ｄ類
027SB	10Ca	6	4	12.0	6.4	Ｆ類
028SB	10Ca	6	2	14.2	7.8	Ｆ類
029SB	10Ca	5	5	10.7	7.7	Ｅ３類
030SB	10Ca	7	4	12.9	6.7	Ｆ類
031SB	10Ca	6	3	10.2	5.4	Ｅ２類
032SB	10Ca	8	3	14.1	7.1	Ｆ類
033SB	10Ca	7	3	10.8	6.5	Ｅ２類
034SB	10Ca	4	3	10.3	6.6	Ｅ２類
035SB	10Ca	4	3	8.9	6.1	Ｄ類
036SB	10Ca	4	1	13.4	4.8	Ｆ類
037SB	10Ca	3	1	8.5	3.5	Ｃ類
038SB	10Ca	6	4	10.4	8.8	Ｅ３類
039SB	10Ca	2	2	5.2	3.3	Ｂ２類
040SB	10Ca	2	2	4.6	3.5	Ｂ１類
041SB	10Ca	4	(1)	5.8	(3.5)	-
042SB	10Ca	3	2	6.3	4.8	Ｂ３類
043SB	10Ca	3	2	7.3	6.5	Ｄ類
044SB	10Ca	5	1	9.1	6.7	Ｄ類
045SB	10Ca	2	1	5.8	3.9	Ｂ２類
046SB	10Ca	4	3	5.8	3.9	Ｂ３類
047SB	10Ca	3	1	4.0	2.8	Ｂ１類
048SB	10Ca	3	1	6.6	3.8	Ｂ２類
049SB	10Ca	2	1	6.8	4.1	Ｂ２類
050SB	10Ca	3	1	5.4	2.7	Ｂ２類
051SB	10Ca	4	1	7.1	3.8	Ｃ類
052SB	10Ca	3	1	6.8	3.1	Ｂ２類
053SB	10Ca	4	1	5.2	3.8	Ｂ２類
054SB	10Ca	3		5.1		-
055SB	10Ca	2	(1)	6.7	(3.0)	-
056SB	10Cab	7	8	19.0	11.2	Ｇ類
057SB	10Da	4	(2)	9.3	(4.5)	-
058SB	10Da	(2)	2	(2.5)	2.6	-
059SB	10Da	(2)	2	(2.5)	2.7	-
060SB	10Da	4	1	7.2	2.6	Ｃ類
061SB	10Da	3	1	4.6	2.2	Ｂ１類
062SB	10Da	(2)	2	(3.3)	4.3	-
063SB	10Da	(2)	2	(4.3)	3.9	-
064SB	10Da	1	1	4.1	2.8	Ｂ１類
065SB	10Da	2	(2)	4.2	(2.3)	-
066SB	10Da	4	1	11.1	3.9	Ｅ１類
067SB	10Da	(2)	2	(4.1)	4.6	-
068SB	10Da	2	1	5.1	3.8	Ｂ２類
069SB	10Da	2	3	8.3	7.9	Ｄ類
070SB	10Da	3	1	5.2	4.3	Ｂ３類
071SB	10Da	2	3	7.3	7.1	Ｄ類
072SB	10Da	3	1	6.7	4.1	Ｂ２類
073SB	10Da	3	1	7.9	4.9	Ｄ類
074SB	10Da	2	2	6.3	6.0	Ｄ類
075SB	10Da	3	3	10.5	10.5	Ｅ３類
076SB	10Da	1	1	4.1	4.1	Ｂ１類
077SB	10Da	1	1	4.8	3.7	Ｂ２類
078SB	10Da	3	1	4.9	3.6	Ｂ２類
079SB	10Da	5	2	13.6	6.3	Ｆ類
080SB	10Da	1	1	4.2	3.6	Ｂ１類
081SB	10Da	2	(1)	8.3	(4.0)	-
082SB	10Da	2	1	4.9	3.6	Ｂ２類
083SB	10Da	2	2	4.9	4.2	Ｂ３類
084SB	10Da	3	2	9.9	5.6	Ｅ２類
085SB	10Da	2	3	5.3	4.9	Ｂ３類
086SB	10Da	5	2	10.3	3.0	Ｅ１類
087SB	10Da	4	1	5.2	4.7	Ｂ３類
088SB	10Da	4	1	6.2	3.4	Ｂ２類
089SB	10Da	5	3	4.8	4.4	Ｂ３類
090SB	10Da	3	1	6.2	3.3	Ｂ２類
091SB	10Da	3	1	6.6	1.6	Ｃ類
092SB	10Da	2	2	2.4	2.3	Ａ類
093SB	10Da	2	(1)	3.3	(2.3)	-
094SB	11D	3	2	5.4	2.8	Ｂ２類
095SB	11D	2	1	4.6	1.8	Ｂ１類
096SB	11D	5	1	8.3	1.8	Ｃ類
097SB	11D	4	2	7.9	3.8	Ｃ類
098SB	11D	4	3	5.9	4.5	Ｂ３類
099SB	11D	3	1	7.8	2.8	Ｃ類
100SB	11D	3	2	4.9	4.4	Ｂ３類
101SB	11D	2	1	4.5	3.8	Ｂ１類
102SB	11D	3	2	5.4	5.2	Ｂ３類
103SB	11D	3	2	3.6	3.4	Ｂ１類
104SB	11D	2	1	4.2	4.0	Ｂ１類
105SB	11D	2	2	5.1	3.8	Ｂ２類
106SB	11D	4	1	5.1	3.8	Ｂ２類
107SB	11D	2	2	4.7	4.2	Ｂ３類
108SB	11D	3	2	5.2	2.9	Ｂ２類
109SB	11D	2	1	6.1	3.1	Ｂ２類
110SB	11D	2	1	4.2	3.0	Ｂ１類
111SB	11D	2	2	3.7	2.3	Ｂ１類
112SB	11D	2	1	3.5	2.7	Ｂ１類
113SB	10Db	3	(1)	4.4	(1.2)	-
114SB	10Db	3	3	3.5	3.1	Ｂ１類
115SB	10Db	3	(1)	2.8	(0.8)	-
116SB	10Db	3	2	5.2	3.0	Ｂ２類
117SB	10Db	2	4	3.7	3.0	Ｂ２類
118SB	10Db	2	1	3.5	2.4	Ｂ１類
119SB	10Db	3	2	4.9	2.7	Ｂ２類
120SB	10Db	4	3	5.2	3.2	Ｂ２類
121SB	10Db	2	3	3.7	3.1	Ｂ１類
122SB	10Db	3	2	3.7	3.4	Ｂ１類
123SB	10Db	3	2	3.7	3.0	Ｂ１類
124SB	10Db	2	4	3.8	3.5	Ｂ１類
125SB	10Db	2	2	5.1	3.7	Ｂ２類
126SB	10Ea	2	1	3.9	2.2	Ｂ１類
127SB	10Ea	3	1	4.5	2.5	Ｂ１類
128SB	10Ea	2	1	4.2	2.1	Ｂ１類
129SB	10Ea	7	2	7.7	2.7	Ｃ類
130SB	10Ea	3	2	4.0	2.3	Ｂ１類
131SB	10Ea	3	2	3.6	3.1	Ｂ１類
132SB	10Ea	2	1	4.3	1.7	Ｂ１類
133SB	10Ea	5	1	5.6	1.0	Ｃ類
134SB	10Ea	4	2	7.1	3.2	Ｃ類
135SB	10Ea	3	3	4.4	2.7	Ｂ１類
136SB	10Ea	4	2	6.0	3.6	Ｂ２類
137SB	10Ea	3	2	3.9	2.2	Ｂ１類
138SB	10Ea	4	3	3.8	2.2	Ｂ１類
139SB	10Ea	3	2	3.7	2.0	Ｂ１類
140SB	10Ea	4	3	3.6	2.7	Ｂ１類
141SB	10Ea	2	3	3.9	2.8	Ｂ１類
142SB	10Ec	2	1	6.9	3.2	Ｃ類
143SB	10Ec	4	1	9.3	3.8	Ｃ類
144SB	10Ec	3	1	4.2	3.7	Ｂ１類
145SB	10Ec	4	1	7.5	4.1	Ｃ類
146SB	10Ec	5	4	8.0	6.3	Ｄ類
147SB	10Ec	2	1	5.3	4.4	Ｂ３類
148SB	10Ec	3	3	4.2	4.0	Ｂ１類
149SB	10Ec	4	3	9.3	5.8	Ｄ類
150SB	10Ec	3	2	7.4	6.6	Ｄ類
151SB	10Ec	3	2	5.9	3.8	Ｂ２類
152SB	10Ec	3	2	7.2	5.8	Ｄ類
153SB	10Ec	2	2	5.7	3.6	Ｂ２類
154SB	10Ed	4	3	7.7	5.6	Ｄ類
155SB	10Ed	4	2	5.6	4.5	Ｂ３類
156SB	10Ed	3	3	8.5	6.3	Ｄ類
157SB	10Ed	4	3	10.3	7.5	Ｅ３類
158SB	10Ed	2	2	7.2	5.0	Ｄ類
159SB	10Ed	2	2	10.6	5.7	Ｅ２類
160SB	10Ed	2	2	4.3	3.8	Ｂ１類

10Bb 区）では数回の建て替えに留まっている。
建物分布３：10Ca 区東半部ではＢ２類を中心に小形建物跡が多く認められる。
建物分布４：10Cb 区と 10Cc 区周辺では建物跡はほとんどなく、復元案が正しければ超大形建物跡が１棟のみ存在する。
建物分布５：10Da 区ではＤ類とＥ類が一定量認められ、Ｂ類の各種が散在している。
建物分布６：11D 区・10Db 区から 10Ea 区ではＢ１類を中心に小形建物跡が密集して確認されている。特に 11D 区東半部、10Db 区東半部および 11Ea 区西半部で密集する。
建物分布７：10Ec 区と 10Ed 区ではＣ類とＤ類とＥ類が多く分布する。

以上の分析から、特大形建物跡は建物分布２（10Ba 区から 10Ca 区西半部）で、大形建物跡は建物分布５（10Da 区）と建物分布７（10Ec 区から 10Ed 区）の２ヶ所で集中的に確認さ

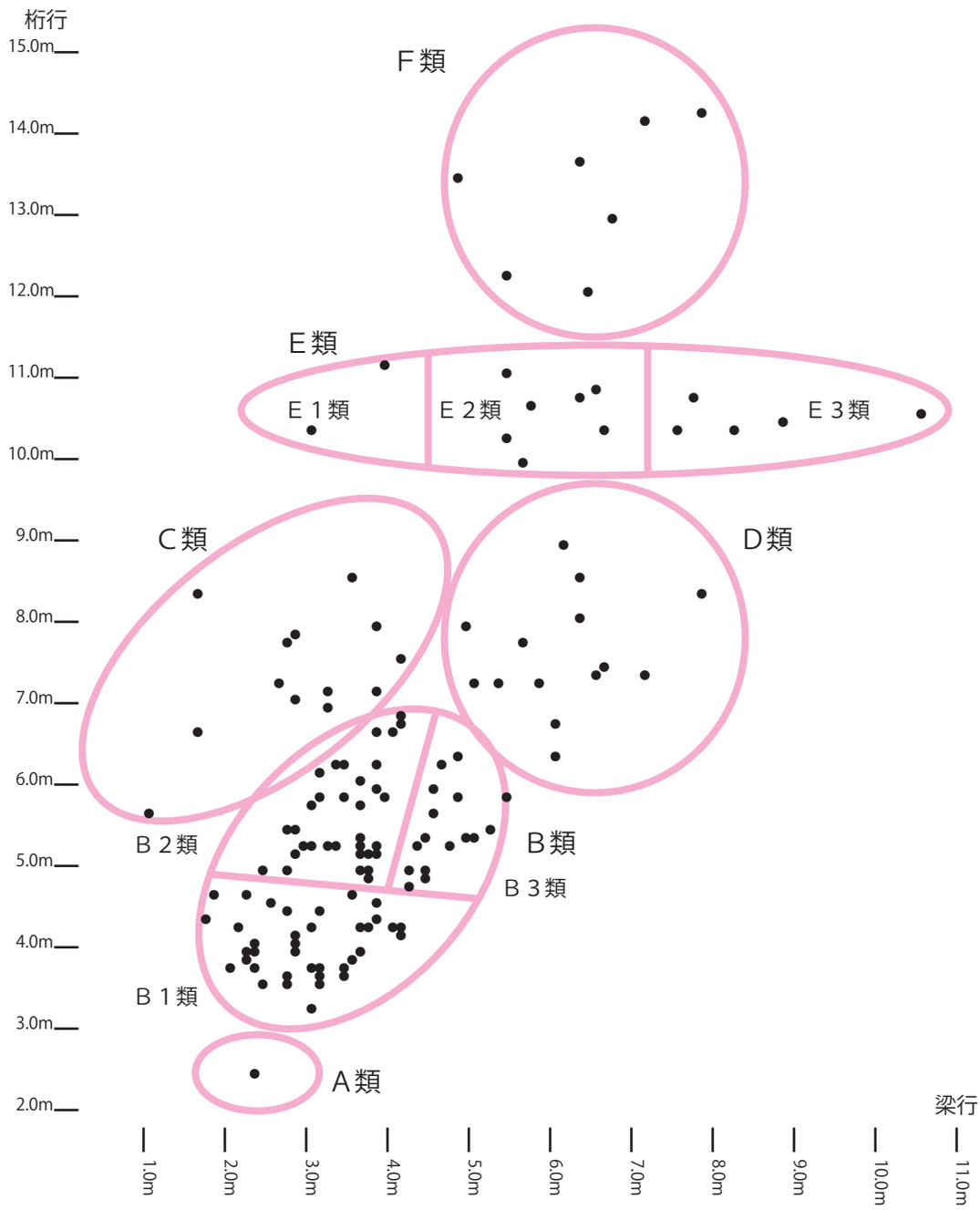


図 11　掘立柱建物跡の平面規模の分布図

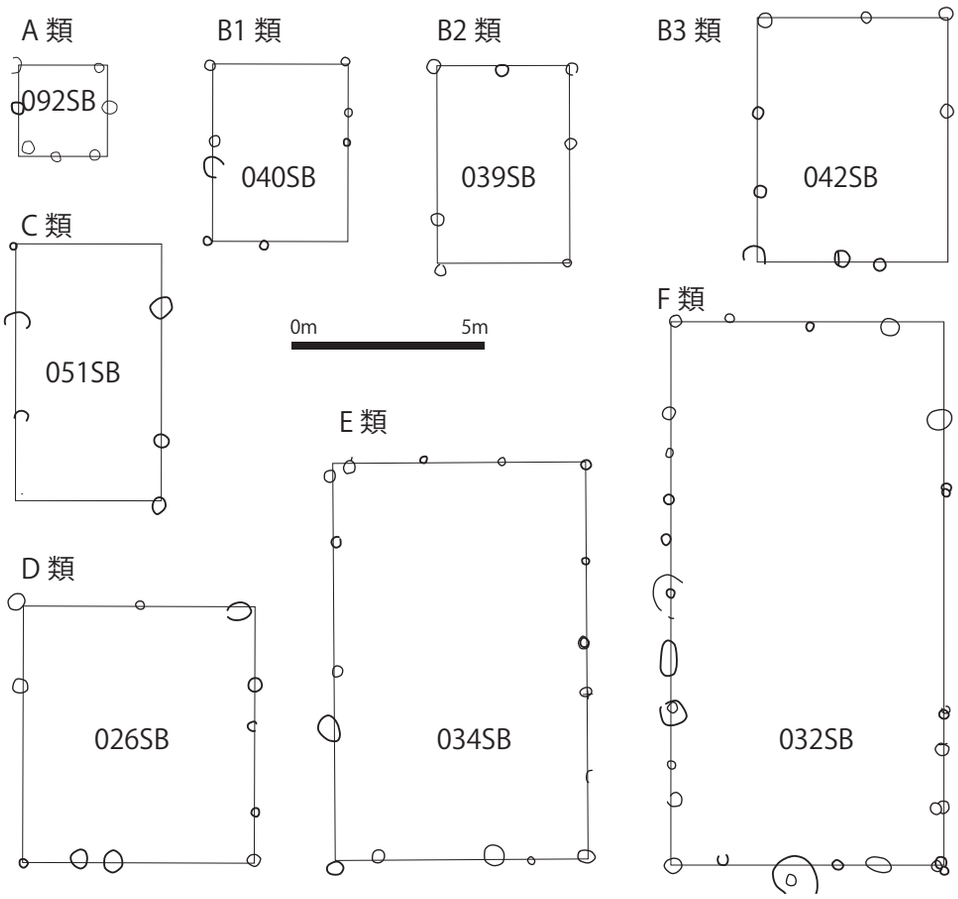


図 12　掘立柱建物跡の分類例（1/200）

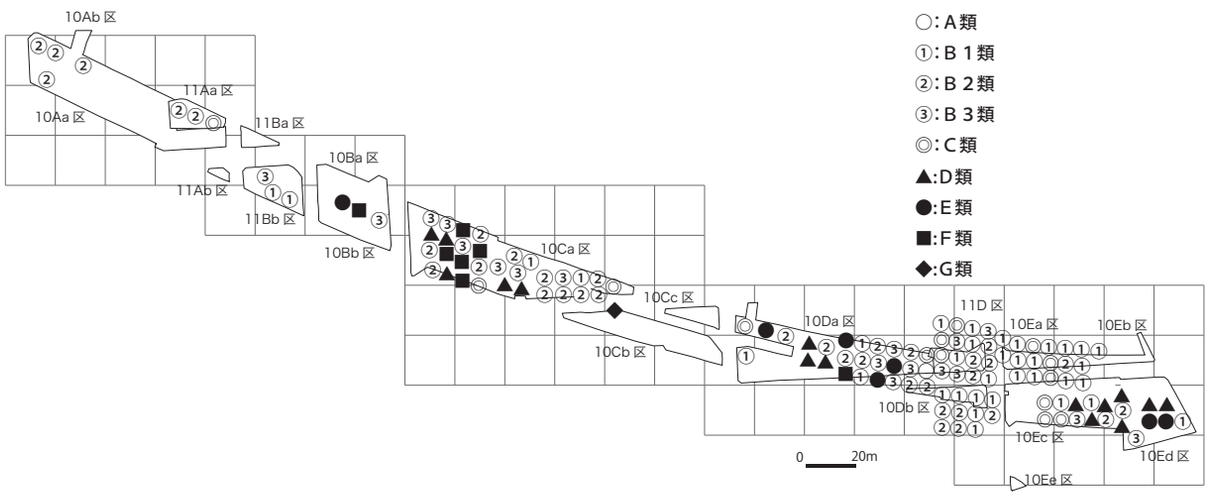


図 13　掘立柱建物跡の分布（1/3,000）

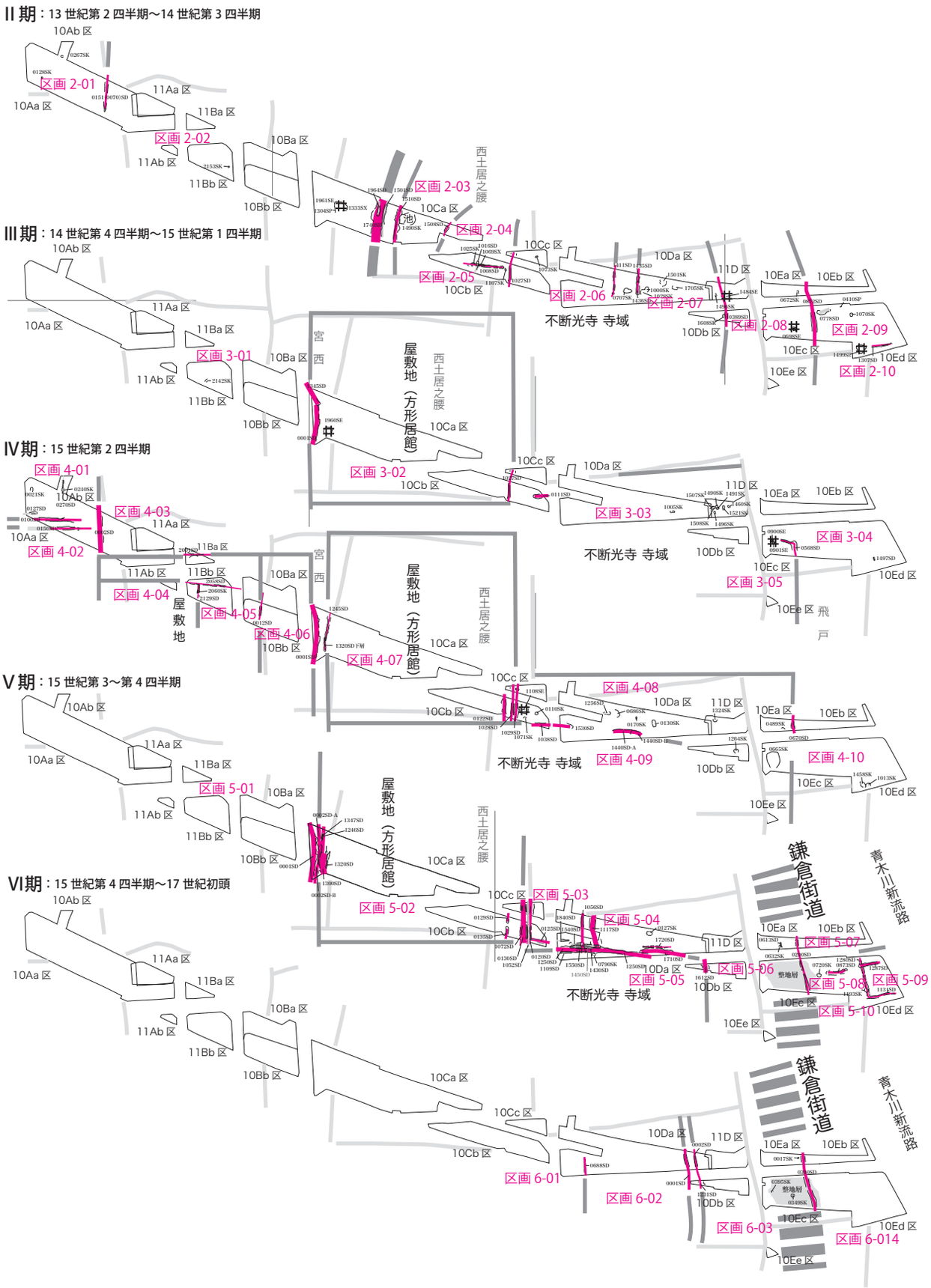


図 14　下津宿遺跡遺構変遷と区画 (1/3,000)

れ、狭い小形建物跡は建物分布６（11D 区から 10Ea 区）に集中することが判明した。建物跡が集中して検出されることは頻繁に建て替えられたことを意味しており、上記の結果は、同じ場所に同じような規模の建物が繰り返し建て替えられたと評価される。また、大形建物跡が分布する区域では小形建物跡も一定量付随しているようにみられる。

（４）小結

以上、掘立柱建物跡の分類と配置を検討した結果、下津宿遺跡の建物配置はある程度固定されており、建物が繰り返し建設されたことが判明した。これは溝（区画溝）が繰り返し重複した状態で確認されたこと（樋上編 2013）と同調する内容である。今回は、建物跡の時期を詳細に検討することを行っていないが、概ね 14 世紀中頃から 15 世紀中頃まではこの状態が継続したものと想定される。（鈴木正貴）

まとめ

最後に、今回分析を行った金属関連資料と土壌水洗篩別により抽出した資料および掘立柱建物跡の分析結果から下津宿遺跡の営みの一端を復元してみたい。

（１）金属関連資料と土壌水洗資料からみえる営み

まず、先に述べたように、鍛冶関連資料と鉄関連資料、粘土製資料は出土分布に相関性が強く認められる。特に鍛冶関連資料と鉄関連資料の関係は、10Ec 区 674SK 出土の２分の１分割椀型滓の上面（報告書番号 6235）に鉄釘が付着している例や、11Aa 区遺構検出時出土した小型椀型滓（報告書番号 6219）には鉄製品と思われるものが内部にかみ込む例があり、これらは生産された製品や鉄加工の原料として混入した痕跡と考えられる。土壌水洗資料の鉄釘や含鉄遺物が多数確認できた 10Da 区 130SK・10Da 区 600SK・10Ec 区 248SK・10Ed 区 1193SK の存在とも結びつくものである。

また、鍛冶関連資料と銅銭の出土分布にも強い相関性がみられることから、鍛冶をはじめとする金属加工を営む居住者が盛んに商業活動を営んでいたことが想像される。

次に土壌水洗資料に関して、抽出できた炭化種実はほとんどがコメであり、オオムギ・コムギ・アズキも少し確認される。より微細なアワ・ヒエなどは確認できていないが、居住者の主食はコメが中心であったといえる。動物遺体では、内湾の浅海から干潟、河口域に生息するアカニシ・アラムシロ・ウミニナ科・ハマグリ・シオフキ・マガキ・フジツボ類の貝類、タイ科・エイ類・サメ類の魚類は、海岸域から遺跡に持ち込まれ、食用として利用されたものである。これらは 10Ca 区・10Da 区・10Ea 区・10Ed 区・11D 区の複数の地点にある遺構から出土しており、下津宿遺跡ではこれら海産物が流通して利用されていたものと考えられる。また、付近の河川で採集できたヤマトシジミやコイ科の魚類もみられる。10Ca 区 SP1 では 1000 個体を超えるヤマトシジミの貝殻が、海岸域から持ち込まれた貝殻と魚骨と一括で廃棄されており、これらの食材が同時に利用され、その際にやや多く出土したヤマトシジミがむき身され調理された可能性もある。

以上の分析成果からは、鍛冶をはじめとする金属加工を営む居住者などが、海岸域から流通した海産物や周辺地域から流通した穀類・川魚を手に入れ、消費していた姿が想起される。（蔭山誠一）

（２）空間利用のあり方と区画の性格

最後に、報告書に記載された遺構変遷図をもとに、金属関連資料・微細遺物・掘立柱建物跡の分布を検討してまとめとしたい。

掘立柱建物跡と鍛冶関連資料の分布が集中する部分の関係は、建物分布１a と 10A 群、建物分布１b と 11Aa 群、建物分布２a と 10B 群、建物分布２b と 10Ca 西群、建物分布３と 10Ca 東群、建物分布４と 10Cb 群、建物分布５と 10Da 西群～ 10Da 東群西半、建物分布６と 10Da 東群東半～ 10Ea・10Ec 群、建物分布７と 10Ed 群と対応する。おおむね建物分布域と鍛冶関連資料分布域は重なるが、鍛冶関連資料分布域のうち、10Cb 群の中心部と 10Ea・10Ec 群南部では建物はほとんど存在しない。

特徴的なのは、13 世紀後半から 15 世紀後半に至る 200 年余の期間に、連続して営まれた金属製品生産が考えられる 11D 群・10Ea・

10Ec 群はおおむね建物分布 6 と重なり、狭い小形建物跡が少なくとも 20 回程度は建て替えられていた状況であった。一方、これ以外の区域は金属関連資料の分布域では比較的短期間の鉄鍛錬鍛冶を主体とした金属製品生産の操業が想定されるが、建物規模からみると特別な傾向を読み取ることは難しい。

最後に、上記の結果を遺構変遷の中に位置づけたい。まず、Ⅱ期からⅥ期までの遺構変遷図の中で、溝などの区画施設によって区分された区画を大きな遺構と認識し、Ⅱ期では区画 2-01 ～区画 2-10、Ⅲ期では区画 3-01 ～区画 3-04、Ⅳ期では区画 4-01 ～区画 4-10、Ⅴ期では区画 5-01 ～区画 5-10、Ⅵ期では区画 6-01 ～区画 6-04 を設定する（図 14）。

Ⅱ期では大きな区画が確認されず、区画 2-02（11Aa 群）・区画 2-03（10Ca 東群）・区画 2-05（10Cb 群）・区画 2-07（10Da 東群）と区画 2-08（11D 群と 10Ea・Ec 群）で該期の金属関連資料群が確認され、これらは区画 2-07 と区画 2-08 を除くと比較的短期間の鉄鍛錬鍛冶を主体とした金属製品生産の操業が想定されるものであった。建物については、時期の特定ができていないという問題があるものの、金属関連資料群が確認される区画で掘立柱建物跡 B 類と C 類が多くなる傾向を読み取ることができる。

Ⅲ期では、10Ca 区を中心に屋敷地（方形屋敷：区画 3-02）が設定された。金属関連資料群は区画 3-02 西端部とその外側部分および区画 3-03 で確認され、区画 3-03 では引き続き継続的な鍛錬鍛冶が行われ、その他の区画では短期間の鉄鍛錬鍛冶を主体とした金属製品生産の操業が想定される。区画 3-02 ではヤマトシジミを大量に出土し、調査区東半部の動物遺体の組成と異なっている。区画 3-02 西半部で大形掘立柱建物跡が存在することと考え合わせると、区画 3-02 は特異な性格を持つかもしれない。Ⅳ期以降も同様の遺構展開とみられる。ただし、Ⅴ期では、新たに鎌倉街道が敷設されたと評価されていた（樋上 2013）が、金属関連資料群の分析では 10Ea・Ec 群はⅤ期まで操業されたと導かれており、この点を合理的に解釈するにはなお検討を要する。

このようにみると、各区画の利用のあり方は個性的かつ多様であることが判明する。今回の分析は特定遺物や遺構の分布を検討したものに過ぎないが、このような分析を積み重ねることにより、各区画の具体的な様子を明らかにすることができるだろう。そして、さらにこうした成果を広げて、下津宿の景観復元に役立てることが重要と思われる。（鈴木正貴）

引用・参考文献

蔭山誠一・鈴木正貴 2002「中世集落と鍛冶—尾張地域を中心として—」『東海の中世集落を考える』第 9 回東海考古学フォーラム尾張大会

鈴木正貴・蔭山誠一 2004「清須城下町における銅製品生産—愛知県における金属製品生産（7）—」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要第 5 号』

樋上 昇編 2013『下津宿遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 175 集